学校建設関係埋蔵文化財調査報告

# 都地遺跡
# (4)

－有田遺跡群第167次調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第434集

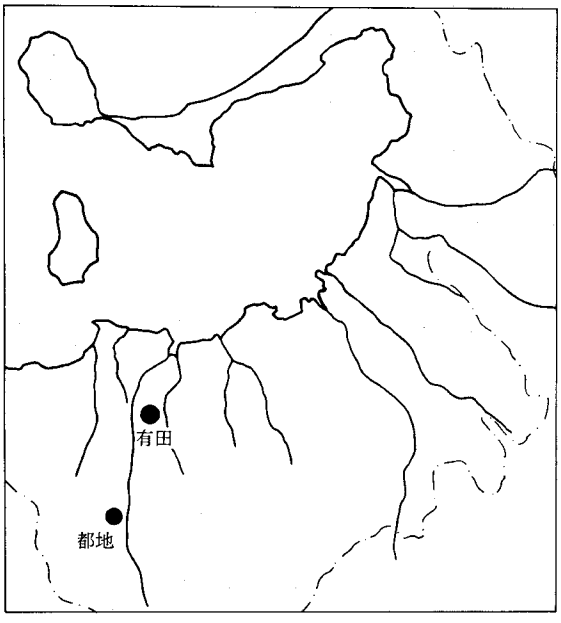
1995

福岡市教育委員会

学校建設関係埋蔵文化財調査報告

# 都地（とじ）遺跡
# （4）

－有田（ありた）遺跡群第167次調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第434集




| 遺跡名 | 調査番号 | 遺跡略号 |
|---|---|---|
| 都地遺跡群第５次調査 | 9311 | TZI-５ |
| 有田遺跡群第167次調査 | 9117 | ART-167 |

１９９５

福岡市教育委員会

SX001（南から）

# 序

玄海灘に広がる福岡市には、豊かな自然と歴史が残されています。これを保護し未来へ伝えていくことは、行政に課された責務であります。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発にともないやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い記録の保存に努めています。

本書は1993年に実施した西区金武小学校体育館兼講堂の建て替えに伴う発掘調査と1991年に実施した早良区西福岡中学校体育館・プール建て替えに伴う発掘調査の成果について報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また、研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から謝意を表する次第であります。

1995年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾　花　　剛

# 例　言

□本報告書は1993年６月に発掘調査を実施した西区金武小学校講堂兼体育館改築その他工事事業に伴う都地遺跡群第５次調査と1991年７月の有田遺跡群第167 次調査の発掘調査報告書である。
□本書に収録した発掘調査は都地遺跡群第５次調査を杉山富雄・屋山洋が、有田遺跡群第167 次調査を松村道博が担当した。
□遺構の実測、遺物の実測・写真撮影は担当者が行った。
□都地遺跡群第５次調査における製鉄関連遺物に関しては穴沢義功・大澤正己両先生から助言をいただいた。
□本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

都地遺跡群第５次調査　TZI-５
調査番号　９３１１
所 在 地　西区大字金武2028-1
開発面積　1700㎡
調査面積　1700㎡
調査原因　金武小学校講堂兼体育館改築その他工事事業
担 当 者　杉山富雄・屋山洋
調査期間　930524～930630

# 本文目次


都地遺跡群第５次調査……1
Ⅰ．はじめに……1
　１．調査に至る経過……1
　２．調査の組織……1
　３．遺跡の立地と環境……1
Ⅱ．調査の記録……4
　１．遺跡の概要……4
　２．弥生時代の遺構と出土遺物……4
　　(1)SK016……4
　３．古代～平安時代の遺構と出土遺物……4
　　(1)掘立柱建物……4
　　(2)溝……9
　　(3)製鉄関連遺構……9
　　(4)ピット……13
　　(5)包含層……13
　３．まとめ……20
有田遺跡群第167次調査……21
１．はじめに……21
　1) 調査に至る経過……21
　2) 調査区の立地と地形……22
　3) 調査の組織……23
２．遺構と遺物……23

# 挿図目次

都地遺跡群第５次調査

第１図　周辺遺跡分布地図……1
第２図　調査区位置図（1/600）……2
第３図　調査区全体図（1/220）……3
第４図　SK016実測図（1/60）……4
第５図　SK016出土遺物実測図（1/3.1/1.1/2）……5
第６図　掘立柱建物実測図Ⅰ（1/100）……6
第７図　掘立柱建物実測図Ⅱ及び出土遺物実測図（1/100.1/3）……7
第８図　SD005・SD006遺構及び出土遺物実測図（1/40.1/1.1/3.1/4）……10
第９図　SX001実測図（1/20）……11
第10図　SK002・SK003・SK004実測図（1/20）……12
第11図　包含層出土遺物実測図Ⅰ（1/3）……14
第12図　包含層出土遺物実測図Ⅱ（1/3）……15
第13図　包含層出土遺物実測図Ⅲ（1/3）……16
第14図　包含層出土遺物実測図Ⅳ（1/3）……17
第15図　包含層出土遺物実測図Ⅴ（1/3.1/1）……18
第16図　包含層出土遺物実測図Ⅵ（1/3.1/2.1/1）……19

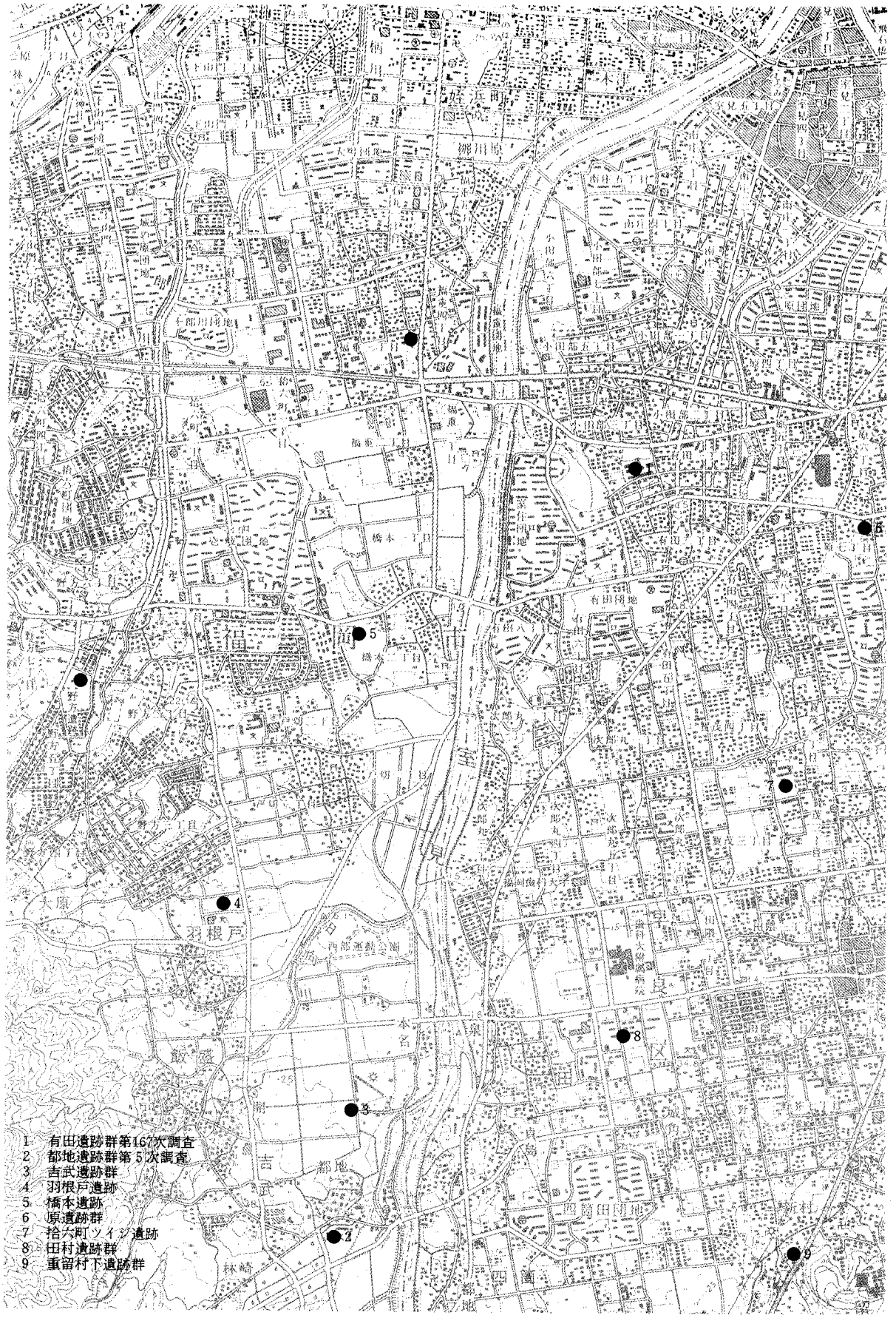
有田遺跡群第167次調査

第17図　周辺遺跡地形測量図（1/4,000）……21
第18図　遺構全体図（1/200）……22
第19図　１・２号土壙（1/30）……23
第20図　３号土壙（1/30）……24
第21図　土壙出土土器(1/3)……25
第22図　溝状遺跡実測図（1/40）……26
第23図　溝・掘立柱建物出土遺物（1/3）……27
第24図　掘立柱建物（1/80）……27

# 図版目次

都地遺跡群第５次調査
図版１　(1)都地遺跡群第５次調査全景（南から）
　　(2)拡張部（北から）
図版２　(1)SB01（東から）
　　(2)SB02（東から）
図版３　(1)SB03（東から）
　　(2)SB04（東から）
図版４　(1)SB06（南から）
　　(2)SD005土層（北から）
図版５　(1)SK002（東から）
　　(2)SK004土層（東から）
図版６　(1)SK003（西から）
　　(2)拡張部（西から）
図版７　出土遺物Ⅰ
図版８　出土遺物Ⅱ
図版９　出土遺物Ⅲ

有田遺跡群第167次調査
図版10　(1)遺跡全景（北より）
　　(2)遺跡全景（西より）
図版11　(1)１号土壙（南西より）
　　(2)１・２号土壙（南西より）
図版12　(1)掘立柱建物（南より）
　　(2)３号土壙（東より）
図版13　(1)各区出土遺物


1 有田遺跡群第167次調査
2 都地遺跡群第5次調査
3 吉武遺跡群
4 羽根戸遺跡
5 橋本遺跡
6 原遺跡群
7 拾六町ツイジ遺跡
8 田村遺跡群
9 重留村下遺跡群

**第1図**　遺跡周辺分布図

# 都地遺跡群５次調査

## Ⅰ．はじめに

### １　調査に至る経過

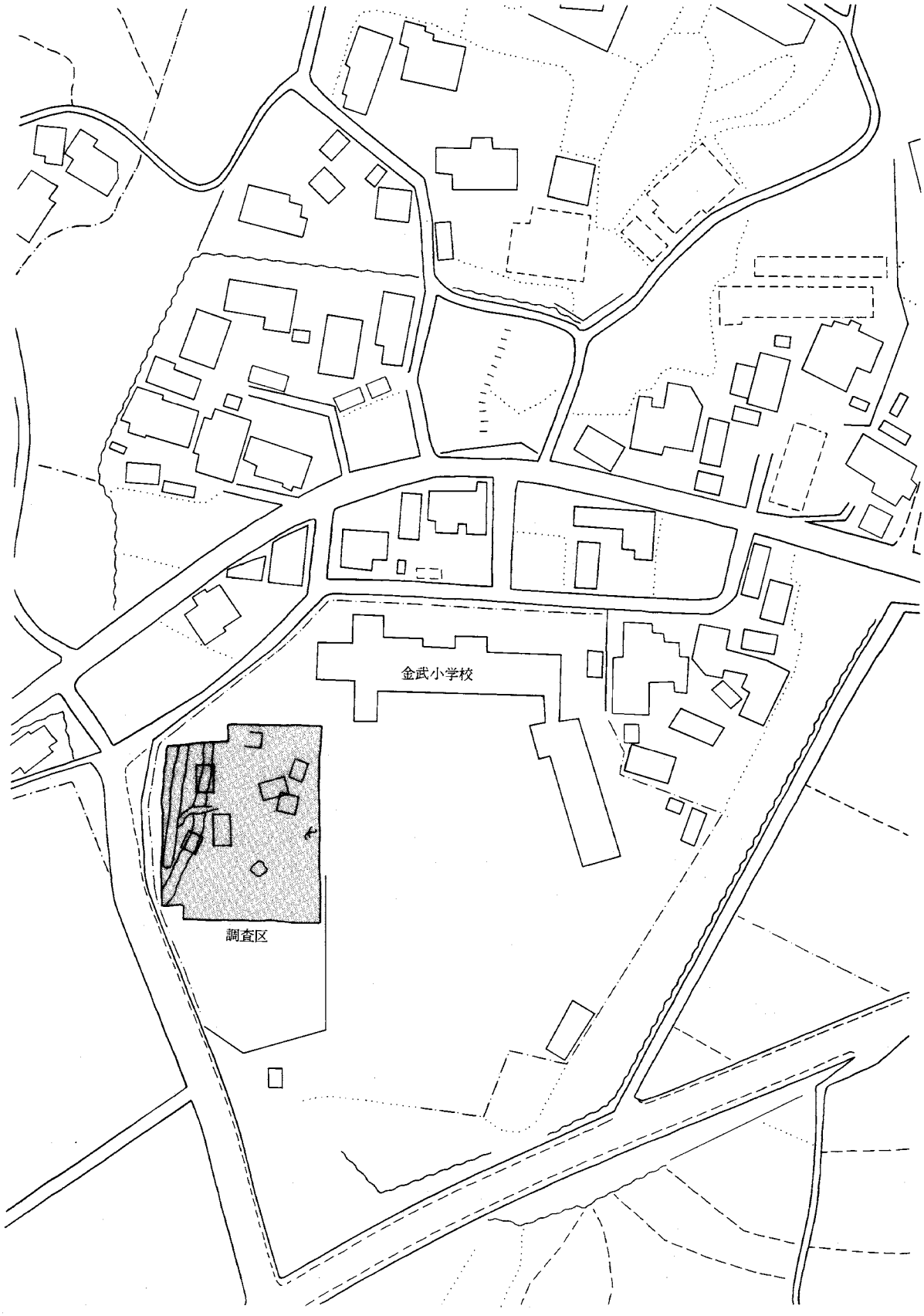
調査区は金武小学校、幼稚園の敷地内であり、幼稚園校舎、小学校の講堂兼体育館、プールが建っていた。しかし、小学校の体育館兼講堂も築数十年経って老朽化が目立ってきたことから建て替えが計画され、その実施に伴い教育委員会文化財部埋蔵文化財課に埋蔵文化財の有無についての照会が提出された。それをうけ旧講堂兼体育館解体前の1994年２月に予備調査を行ったところ、溝・ピット等が検出され遺構が存在することが確認された。その後解体後の５月に詳細な試掘調査を行ったが、溝２条、ピット、土坑、製鉄遺構等を検出した。特に溝については北側に隣接する都地城址と関連するものと考えられた。本調査は1994年５月24日～６月30日の期間実施した。

### ２　調査の組織

調査委託　福岡市教育委員会施設部施設課
調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第１係
調査総括　埋蔵文化財課長　折尾学
　　埋蔵文化財課第１係長　横山邦継
調査庶務　埋蔵文化財課第１係　中山昭則（前）　内野保基（現）
調査担当　埋蔵文化財課第１係　杉山富雄　屋山洋
調査補助　英豪之
調査作業　西嶋利規　広瀬梓　吉岡久夫　青柳寿子　青柳美智子　井上トミ子　井上ヒデ子
　　大穂アサ子　大穂栄子　大穂ヤス子　金子ヨシ子　清末シズエ　栗木和子
　　正崎由須子　高橋茂子　辻節子　土生喜代子　土生ヒサヨ　土生ミサオ
　　平野ミサオ　森山宣子　結城千代子
整理作業　神谷玲子　黛早津紀　黛早苗　浜野亜希子　浜野年代　山口初子

### ３　遺跡の立地と環境

背振山系から派生した山塊は西山、飯盛山、叶岳から北に延び、長垂の海岸まで続いて早良平野と糸島平野とを分ける。さらに東側は油山から北に延びる飯倉丘陵によって福岡平野と分かれて小平野を形成する。西山から延びる丘陵は東に傾斜を持ちながら室見川へと達する。都地遺跡群第５次調査地点は室見川左岸の段丘上の突端部で、丘陵が北と南へ緩やかに傾斜する分水嶺に位置する。生活に適していたと思われ、平坦部には住居跡、館跡、甕棺墓群や旧石器時代の遺物も見られる。山裾には古墳群が形成されている。周辺では１次調査で都地城址、２次調査は弥生時代のピットや古墳時代住居跡、弥生～中世の包含層、３次調査は甕棺墓群や弥生～平安時代の掘立柱建物が検出されている。




**第2図**　調査区位置図（1/600）

**第3図**　調査区全体図（1/220）

## 調査の記録

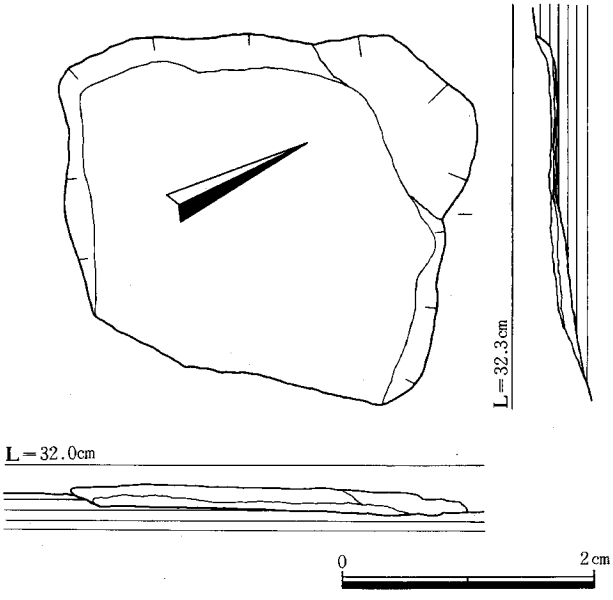
### 1　遺跡の概要

今回の調査区は都地遺跡群の東寄りに位置し、室見川左岸の丘陵の端に位置する。調査区の標高は北端で32.6m、南端で32.8m。調査区南側に僅かな谷部が形成されているが、谷部の一番低いところで31.6mを測る。前述した様に構造物施工箇所を対象として1700㎡を調査した。調査区は西から東へと緩やかに傾斜しており、また南側に幅約20m、深さ1.2mの緩やかな谷が入る。調査区から100m東は急峻な崖面で平野部との比高差は約15mを測る。調査区は金武小学校の運動場で戦時中は畑となっていた。旧体育館兼講堂の構造物基礎部分によって削平を受けていたが、北側平坦部で古代～中世の掘立柱建物、製鉄関連遺構、溝等を検出。また、南側谷部では弥生時代土壙、8世紀前～後半の包含層を検出した。なお、遺構番号は原則的に調査順に3桁の通し番号を用いた。報告にあたっても調査時の遺構番号に遺構略号を付けて使用した。

### 2　弥生時代の遺構と出土遺物

#### (1)　土坑（第4図）

**SK016**　調査区の南寄りに位置する。谷部の斜面上にあり、方形を呈す。長径312cm、短径284cm、深さ9cmを測る。壁は南北と西側は明確に見られるが、谷に向かう東側は緩やかに低くなっており、壁の立ち上がりはみられない。覆土は砂質土で明灰褐色を呈しており、地山との区別はつきにくい。出土遺物（第5図　001～007）。遺物はどれも風化が著しく調整等は不明である。001は袋状口縁壺で、壺の口縁から頸部部分が残存しており、復元口径は18.3cmを測る。胎土は黄褐色を呈し、1mm程の砂を多量に含んでいる。焼成はやや甘く軟質である。002は壺の口縁部分で復元口径は15.2cmを測る。胎土は明褐色で2mm程の砂を多量に含んでおり、やや軟質である。003は壺の底部で底径9.6cmを測る。胎土から002の底部であると思われる。004は椀である。復元口径16.3cm、底径6.2cm、器高10.2cmを測る。外面は口縁から1～3cmを除いた全面が黒く焼けている。胎土は黄白色で1～5mm程の白色砂を非常に多く含む。005は甕の口縁～胴部である。器高は約17cmほどである。胎土は黄白色で1mm程度の砂を多く含む。006は安山岩製磨製石斧である。刃部先端は使用により、凹んでいる。007は黒曜石製の石鏃である。先端を欠く。

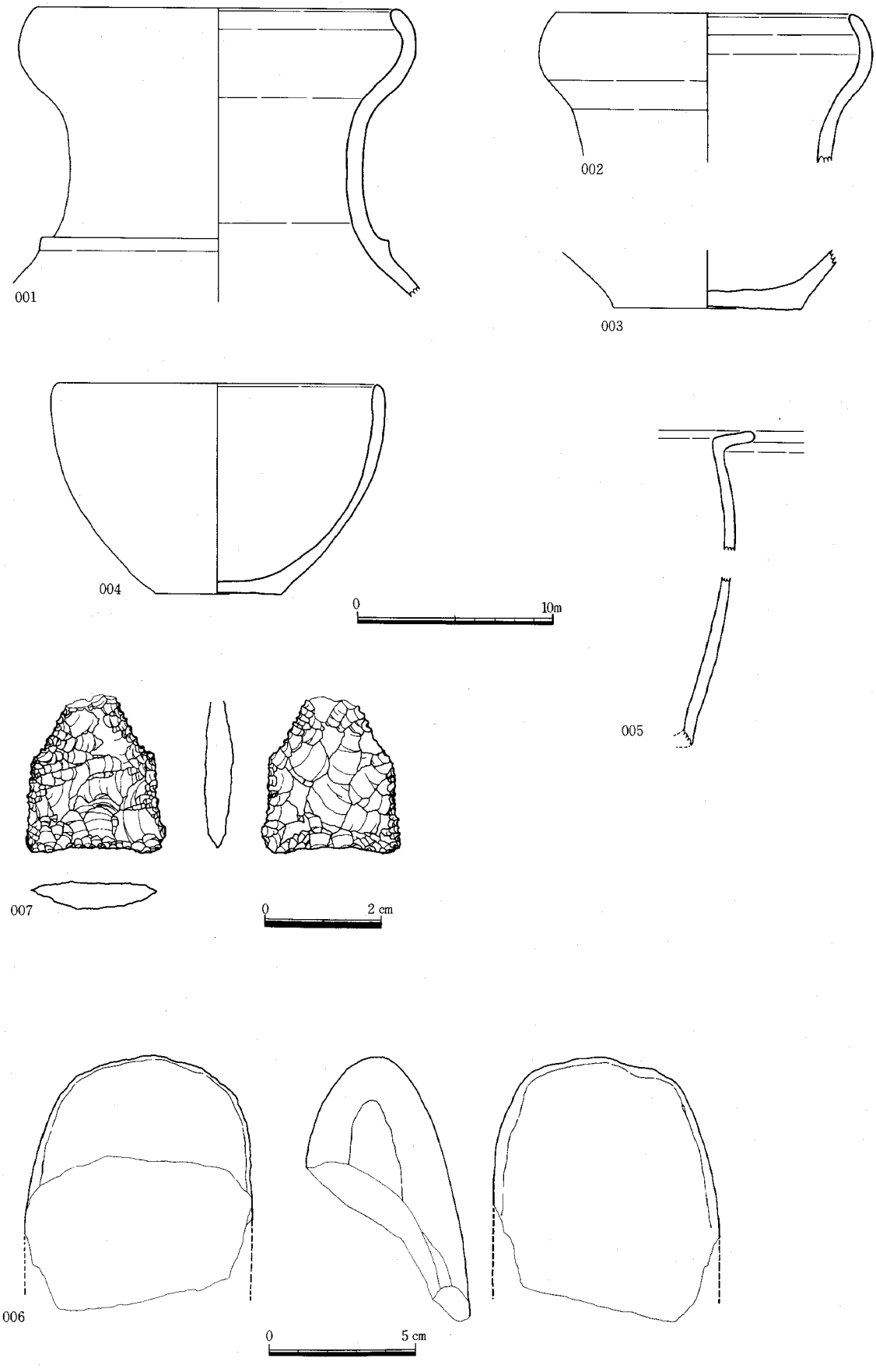



**第4図**　SK016実測図（1/60）

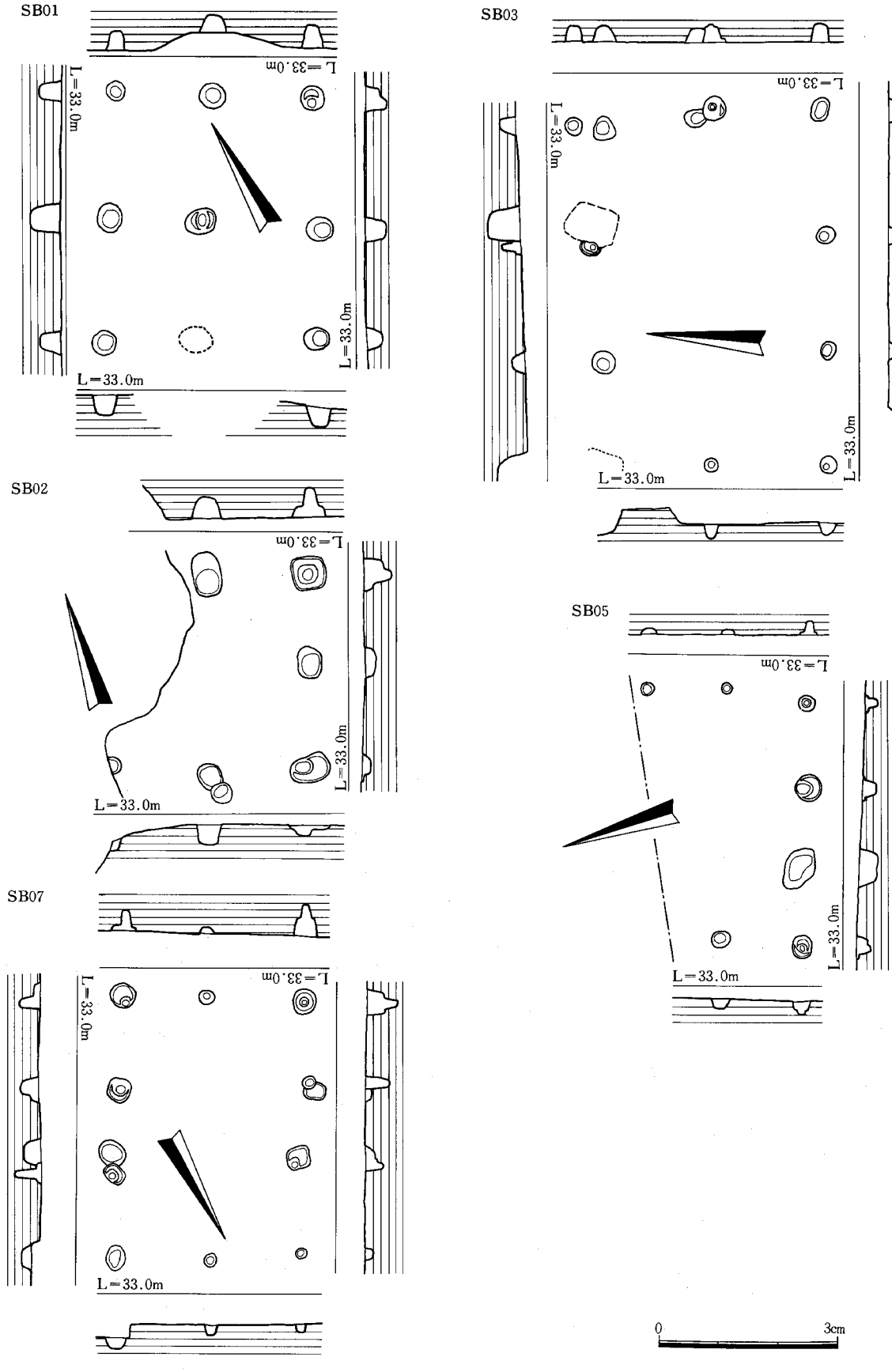
### 3　古代～中世の遺構と出土遺物

#### (1)　掘立柱建物

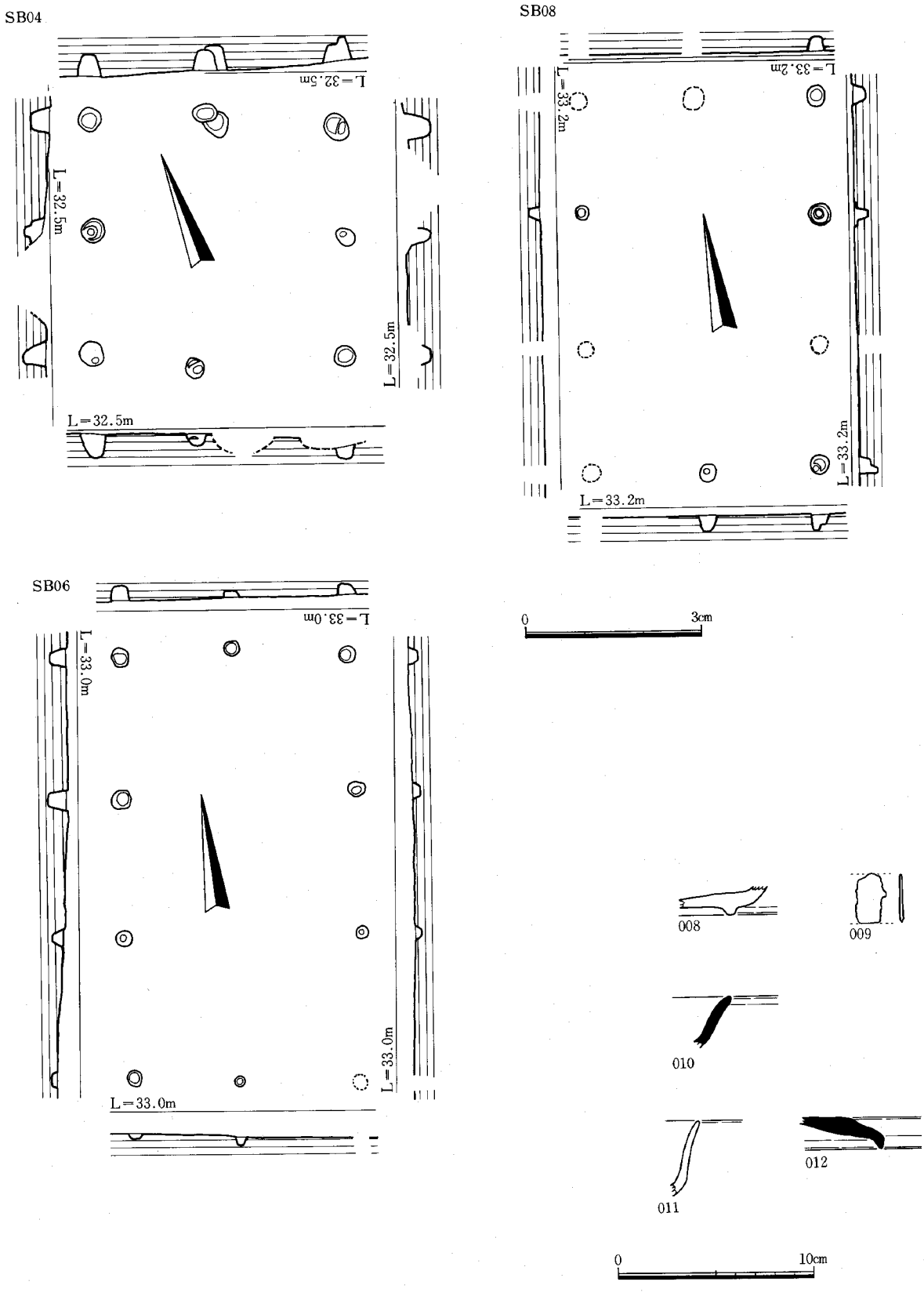
調査区の北半分であわせて8棟を確認した。うち6棟は出土遺物や切りあいから7世紀～平安時代の建物であると思われる。2棟は時期を推定できない。




**第5図**　SK016出土遺物実測図（1/3.1/1.1/2）




**第6図**　掘立柱建物実測図Ⅰ（1/100）




**第7図**　掘立柱建物実測図Ⅱ及び出土遺物実測図（1/100.1/3）

**SB01**（第６図）　調査区の南東寄りで検出した２間×２間の総柱建物である。主軸方向はＮ－30°－Ｅにとる。梁間は全長4.20ｍを測る。桁行の全長は3.31ｍで柱間は1.56ｍ～2.04ｍである。柱穴は円形を呈し、径33㎝～54㎝、深さ30㎝～61㎝を測る。中央の柱と北側の梁柱との間に柱穴と同じレベルで焼土を多量に検出した。この建物と何らかの関係があると思われる。出土遺物は無いがSD005が完全に埋没する以前に建てられており、７世紀代か。

**SB02**（第６図）　調査区の北側で検出した。西側が攪乱によって破壊されており全容は明らかでは無いが、現存では２間×２間の側柱建物で主軸方向をＮ－107°－Ｅにとる。梁間は全長3.26ｍを測る。桁行は全長3.25ｍで柱間は1.47ｍ～1.73ｍである。柱穴は円形、楕円形、方形を呈しており径25㎝～73㎝、深さ28㎝～65㎝を測る。調査区北東側のピット群の覆土は赤褐色であるがこの建物の柱穴の覆土は暗茶褐色で明らかな違いがみられた。出土遺物（第７図　008）須恵器高台付坏である。胎土は灰白色で焼成不良と磨滅の為、調整は不明である。その他に須恵器甕や須恵器坏蓋、土師器甕等が出土しているが、いずれも小片で図化することはできなかった。

**SB03**（第６図）　調査区の東側で検出した２間×３間の側柱建物である。主軸方向をＮ－83°－Ｅにとる。SB04を切る。梁間は全長6.02ｍを測る。桁行の全長は4.20ｍで柱間は1.93ｍ～2.11ｍである。柱穴は円形を呈しており径23㎝～39㎝、深さ14㎝～47㎝を測る。覆土は赤褐色土で、西北隅の柱穴は攪乱の為消滅している。出土遺物は須恵器、土師器が出土しているが極小片で図化できるものはなかった。その他、鉄滓も出土している。７世紀代か。

**SB04**（第７図）　調査区の東側で検出した２間×２間の建物でSB03に切られている。建物の中央に攪乱の溝があるため、総柱であるかどうかは明らかでない。形はほぼ正方形であるのでどちらが梁方向であるか不明であるがSB02に合わせて東西を梁方向とすると主軸方向はＮ－20°－Ｅにとる。梁間は全長4.27ｍ、桁行は4.17ｍを測り、柱間は1.87ｍ～2.40ｍである。柱穴は円形を呈し、径35㎝～47㎝、深さ25㎝～51㎝を測る。覆土は赤褐色である。南東の隅の柱穴がSK004に切られている。出土遺物（第７図　009）鉄片である。長さ2.5㎝、幅1.4㎝を測る。片方に刃がついているので刀子などの破片であると思われる。その他に須恵器、土師器が出土しているが極小片のため図化することはできなかった。鉄滓も出土している。遺物が少ないため時期は明確ではない。

**SB05**（第６図）　調査区の北側で検出した。建物が調査区外に延びているため全容は明らかではないが現存では２間×３間の側柱建物で、主軸方向をＮ－107°－Ｅにとる。梁間は全長4.35ｍ、桁行は全長2.19ｍを測り、柱間は1.33ｍ～1.50ｍである。柱穴は円形を呈し、径18㎝～53㎝、深さ８㎝～32㎝を測る。

**SB06**（第７図）　調査区のほぼ中央で検出した２間×３間の側柱建物である。主軸方向をＮ－6°－Ｅにとる。東南隅の柱穴は攪乱のため存在しない。梁間は全長7.27ｍを測る。桁行は全長3.87ｍで柱間は1.80ｍ～2.45ｍを測る。柱穴は円形を呈し、径14㎝～31㎝、深さ６㎝～37㎝を測る。出土遺物は無いが、SB08と主軸方向や平面規模が同じ事から、ほぼ同一時期であろうと考えられる。

**SB07**（第６図）　調査区の北東寄りで検出された２間×３間の側柱建物である。主軸方向をＮ－27°－Ｅにとる。梁間は全長4.47ｍを測る。桁行は全長3.0ｍを測り、柱間は1.08ｍ～1.67ｍを測る。柱穴は円形もしくは方形を呈し、径８㎝～25㎝、深さ９㎝～38㎝を測る。桁行に比べ梁間が狭く、特に東西両側とも真ん中の２柱穴の間隔が狭い。出土遺物（第７図　010）須恵器坏の口縁部分である。口縁端で緩く外側に反っている。胎土は灰白色で細かな砂を僅かに含んでいる。その他には土師皿も出土しているが調整は不明である。鉄滓も少量出土している。

**SB08**（第７図）　調査区の北西側で検出された。SD005を跨ぐ。攪乱、削平によって柱穴の半数

は消滅していて全容は分かりにくいが、２間×３間の側柱建物であると思われる。主軸をＮ－9°－Ｅにとる。梁間は全長6.83ｍ、桁行は全長4.05ｍを測る。柱間は1.88ｍ～2.0ｍを測る。柱穴は円形を呈し、径19㎝～34㎝、深さ12㎝～37㎝を測る。出土遺物には須恵器、土師皿があるが、極小片のため図化はできなかった。この建物はSD005が完全に埋没してから建てられている。

(2)溝

**SD005**（第８図）　調査区の西側をほぼ南北に縦断している。緩やかな弧状を呈す。ほぼ中央を東西方向に流れる自然河川によって切られている。溝の深さは北側で57㎝を測る。断面はコの字型を呈す。底面はほぼ水平である。自然河川のすぐ南側で２段に落ちており、深さ92㎝を測る。断面は逆台形を呈しており、土層断面では水の流れた痕跡は観察できなかった。包含層が上に被っているが遺物の混入が全く無いので７世紀末頃には完全に埋没していたと思われる。出土遺物（第８図　013～015）013・014は須恵器の坏蓋である。013は灰色を呈し、焼成は良好である。014は灰白色を呈す。015は黒曜石製の細石刃である。自然河川から北では013・014を始として須恵器坏や土師器甕などの小破片が多く出土したが、南側の深い部分ではほとんど遺物の出土はなく、015が最下層から出土した他は土師器甕片が１点ほど出土しただけである。

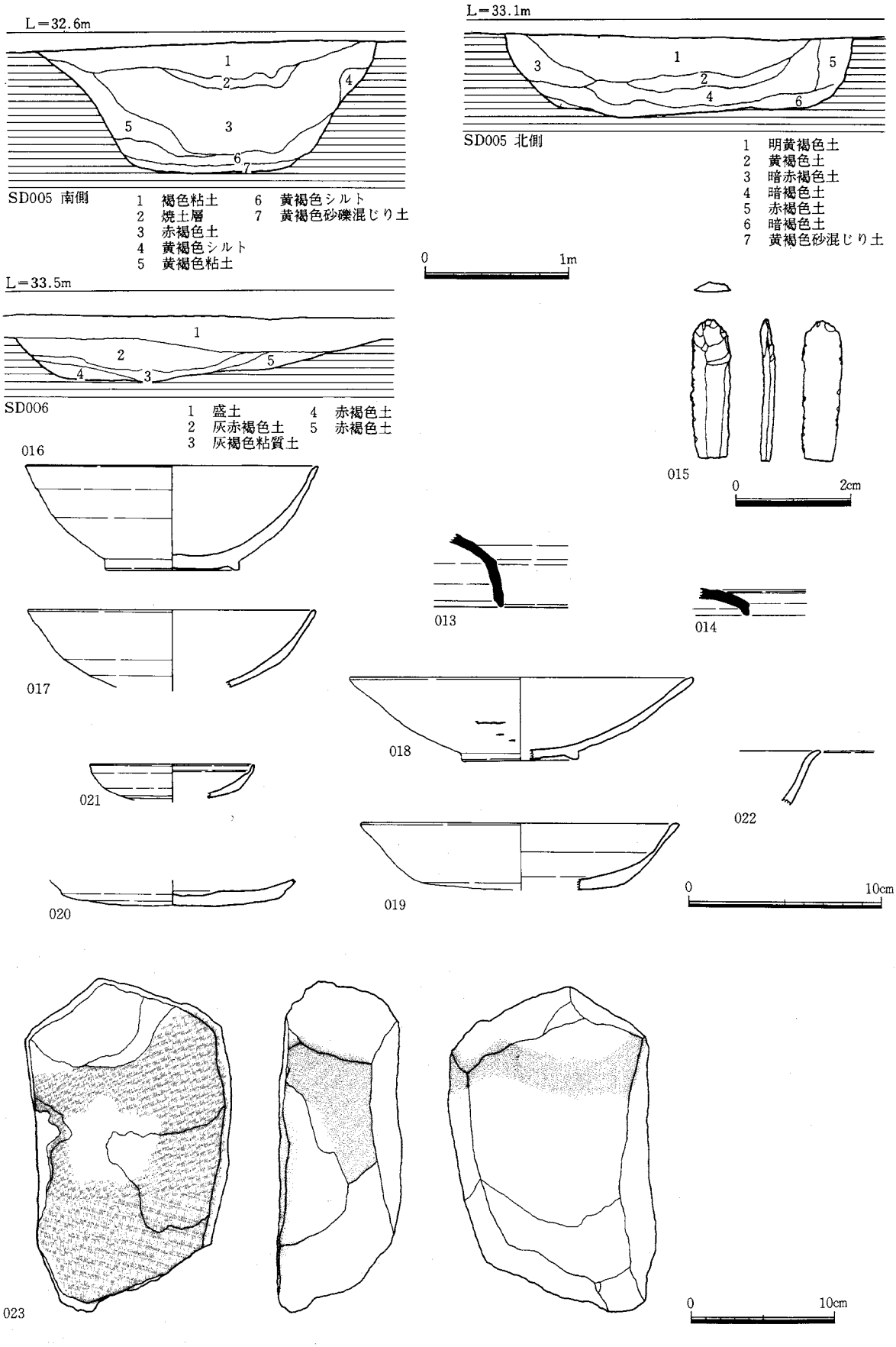
**SD006**（第８図）　調査区の西側、SD005の西隣に位置する。ほぼ直線で、主軸をＮ－16°－Ｅにとる。溝の深さ約45㎝を測る。断面コの字型を呈す。覆土は灰褐色を呈す。溝を主軸で切ると床面の深さは北側から30㎝、20㎝、40㎝、20㎝、35㎝と高低を繰り返している。また、20㎝の床面は約７ｍ、30～40㎝の深い部分は約５ｍと規則的である。床や壁には約５㎝の厚さで黄色粘土が貼られていた。溝は調査区の北側で立ち上がり始めており、北端の土層断面では確認できなかった。出土遺物（第８図　016～023）016～018は土師質の椀である。016は色調は灰色を呈す、口縁部はやや黒ずむ。焼成は良好である。復元口径は口径15.0㎝、底径6.9㎝、器高5.4㎝を測る。017は復元口径14.8㎝を測る。色調は内面及び外面口縁部は黒色を呈し、外面の残りは灰色を呈す。焼成は良好である。018は口径17.8㎝、底径5.9㎝、器高4.4㎝を測る。色調は外面口縁と内面一部が黒色で他は灰色を呈す。外面胴部に横に撫でたあとが見られる。019は坏である。復元口径16.6㎝を測る。色調は黄白色を呈し、焼成不良で調整は不明である。020は土師坏である。底径11.4㎝を測る。暗茶褐色を呈し、外面底部はヘラ切りで板状圧痕が見られる。021は復元口径8.5㎝を測る。外面は口縁から胴部にかけて黒色で胴部下部に２本の黒い線が見られる。022は白磁碗である。色調は灰白色を呈す。釉は極めて薄く、細かなひび割れが見られる。023は金床石である。３面が焼けて黒ずんでいるが左端の面は面全体がかなり黒く焼けており、中央部が欠けて凹んでいる。

(3)製鉄関連遺構

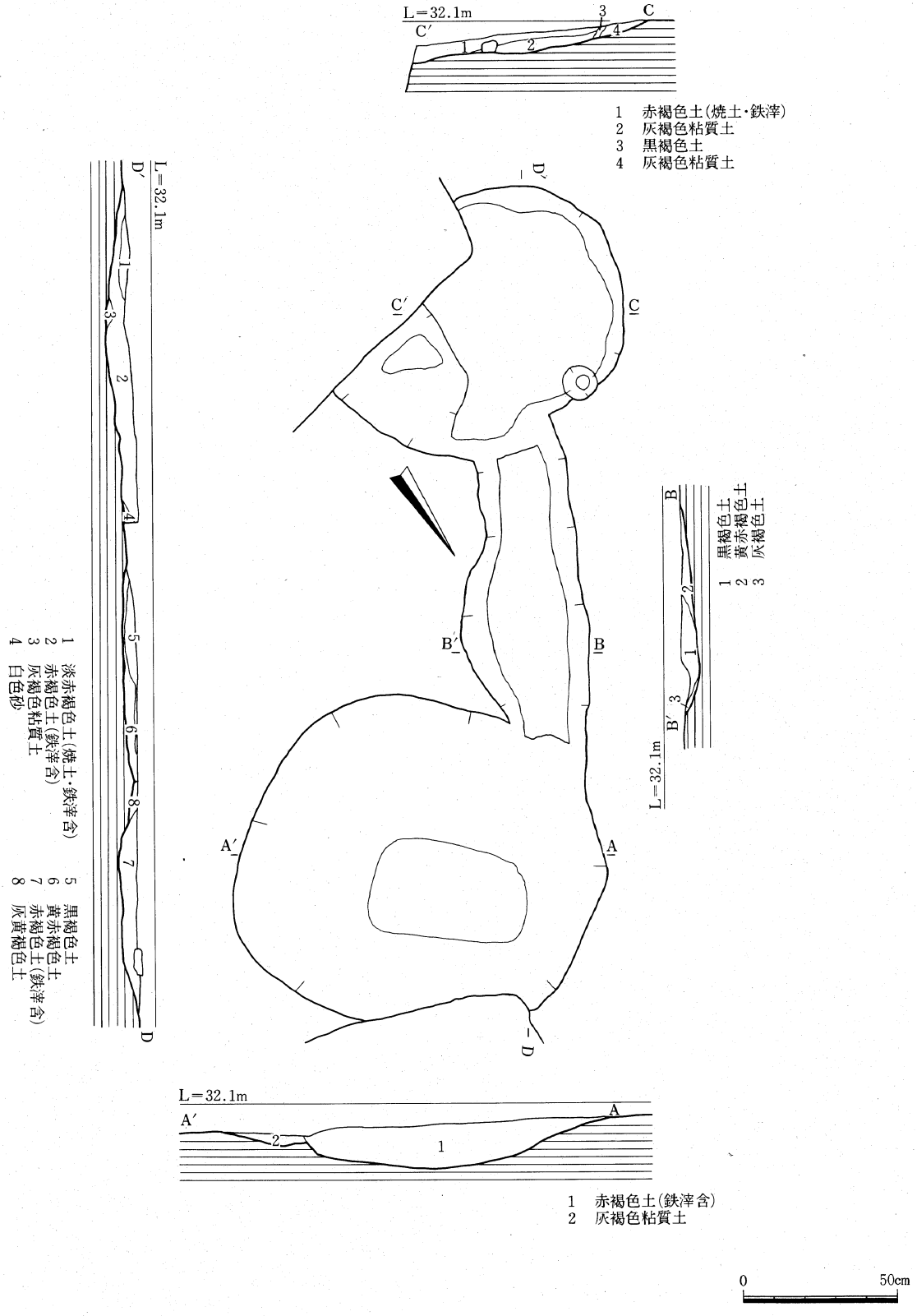
**SX001**（第９図）調査区の東側に位置する。主軸方向を　Ｎ－34°－Ｅにとる。かなり削平されているため上部構造は失っており、防湿の為の溝状の地下施設のみが残存する。遺構全体としては鉄アレイ型を呈している。中央は溝状の防湿施設で現存で幅32㎝、長さ89㎝を測る。地山を皿状に堀り込んだあと赤褐色の粘質土を貼り、中央部の長さ50㎝、幅28㎝の範囲に木炭の粉を敷きつめている。木炭の上部は硬く締まっていて青白い光沢をもつ。

溝の両側に排滓ピットをもつ。規模は北側が円形を呈し107㎝×92㎝、深さ15㎝を測る。南側は楕円形を呈し102㎝×71㎝、深さ７㎝を測る。両方の遺構内から鉄滓が約６㎏出土した。

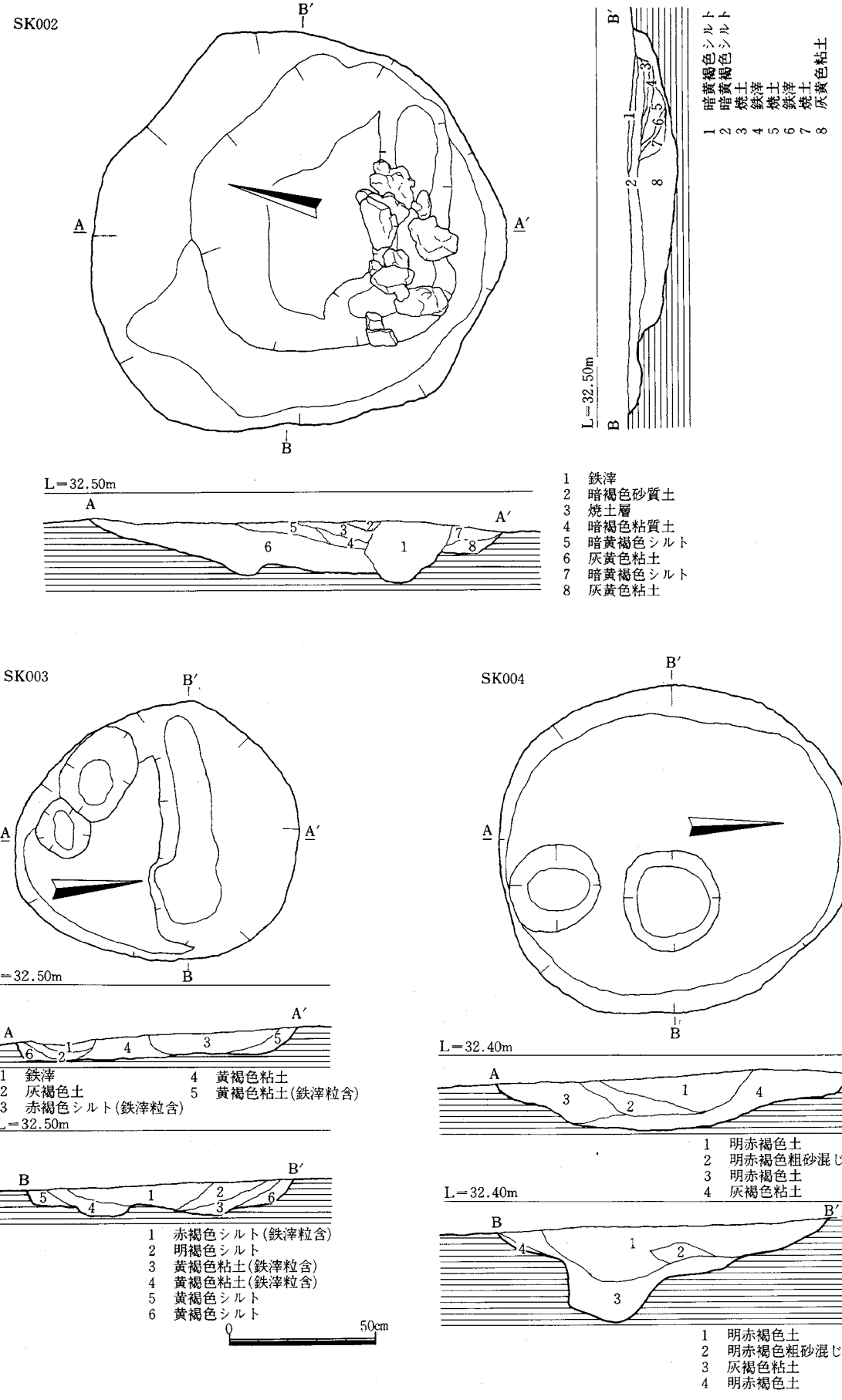
**SK002**（第10図）SX001の西側に位置する。排滓ピットである。SK004を切っている。SK003と同一遺構であると思われSX001と同じ鉄アレイ型を呈するものと思われるが削平により、排滓ピットの間に木炭の粉が僅かに見られる程度である。規模は142㎝×133㎝、深さ19㎝を測る。遺構内から約14㎏




**第8図** SD005・SD006遺溝及び出土遺物実測図（1/40.1/1.1/3.1/4）




**第9図** SX001実測図 (1/20)




**第10図**　SK002・SK003・SK004実測図（1/20）

の鉄滓を検出した。出土遺物（第７図　011）土師器椀である。白色を呈し、胎土は非常に細かい。

**SK003**（第10図）　規模は98㎝×88㎝でほぼ円形を呈する。深さは12㎝を測る。鉄滓が約３㎏出土した。

**SK004**（第10図）　SX002に隣接し円形を呈する。長径121㎝、短径113㎝を測る。皿状に堀りこまれており、深さ18㎝を測る。SB04の東南端のピットの跡に造られているが、ピットの中を丁寧に浚ったあと褐色の粘質土を側壁で10～30㎝、底部で５㎝程度貼り、その上に赤褐色の粘土を詰めているため、粘土貯蔵用の土坑であると考えられる。出土遺物（第７図　012）須恵器坏蓋である。灰白色を呈し、砂粒を多く含む。焼成は不良である。SK002の炉壁を築造したときの残りの粘土とも考えられる。

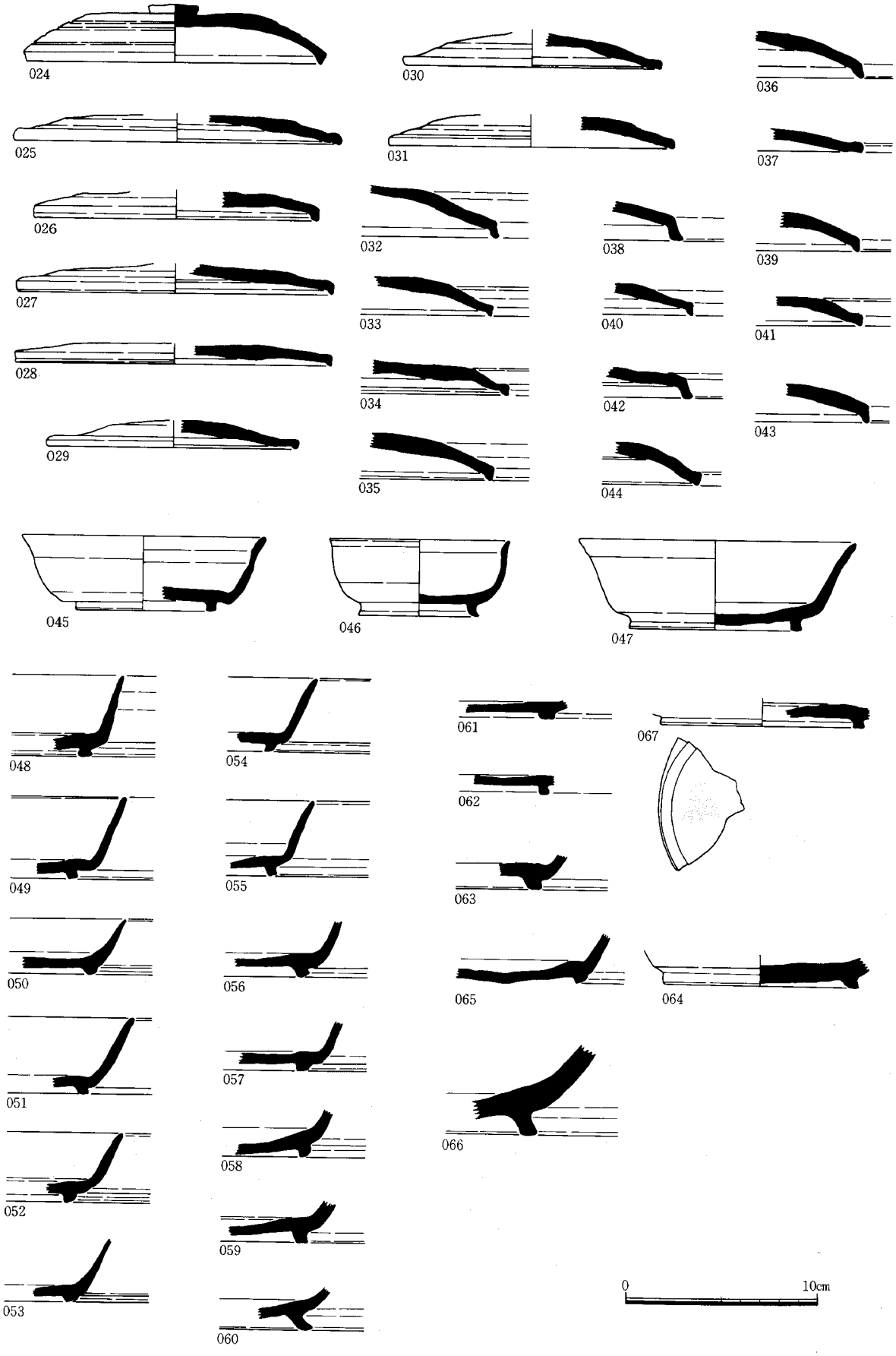
(4)　ピット群

**SP0008**（第３図）　調査区の北側に位置し、径40～28㎝、深さ48㎝を測る。遺構内から羽口片と鉄滓が出土した。その他にも鉄滓の出土は多く、遺物が出土したピットの半数から鉄滓が出土している。鉄滓が出土した遺構は調査区の東側に集中しているが、その中でも３か所に分かれている。そのうち２つはSX001、SK002・SK003の製錬炉の周辺である。あと一か所は調査区の北端で鉄滓出土ピットが一番集中している。羽口が出土したSP0008もこの中にあるため、この周辺に製錬炉の存在が考えられる。

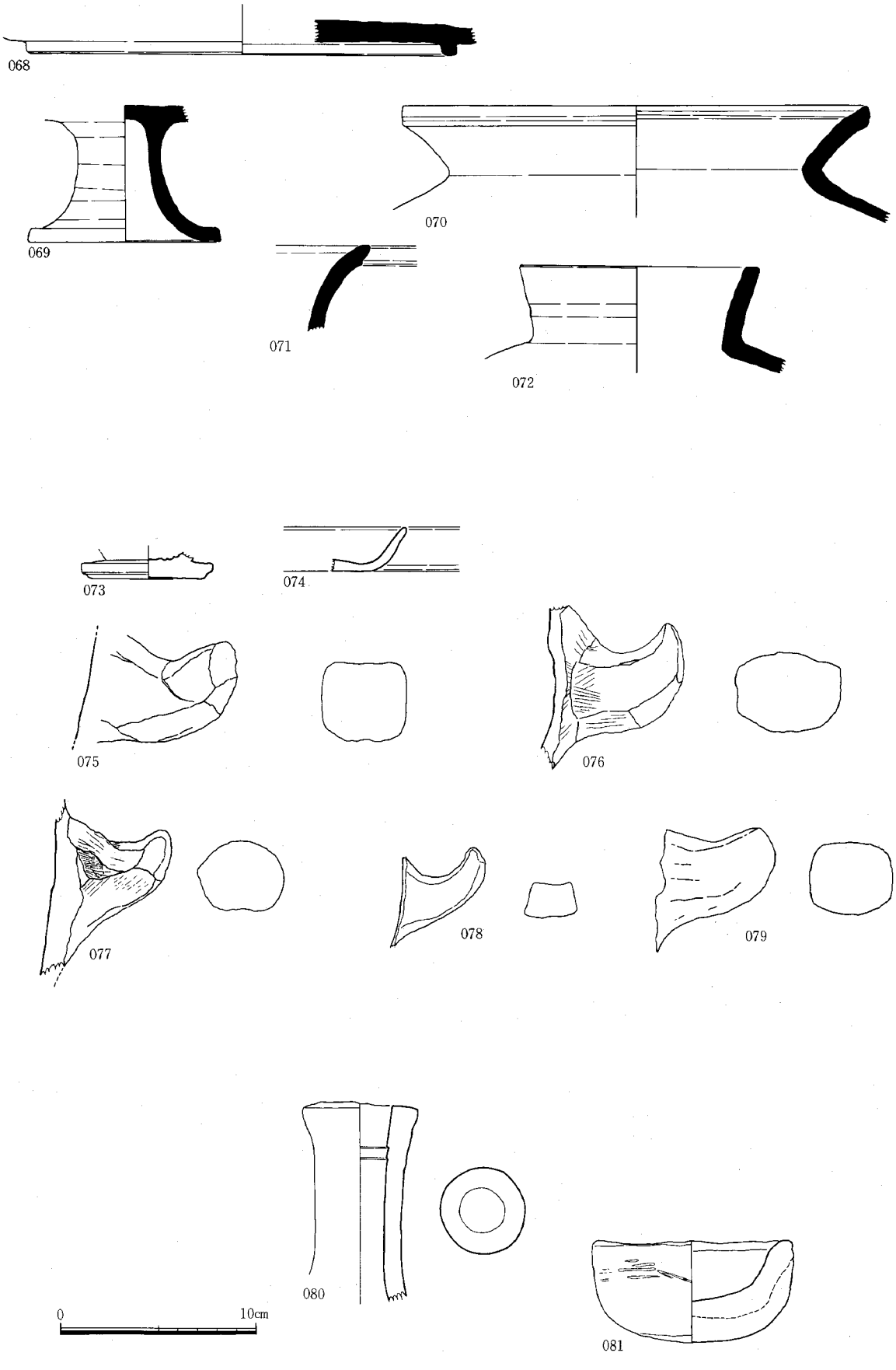
(5)　包含層　（第３図）

調査区の南西側、谷の標高32.4ｍから31.8ｍの等高線に沿うように位置し、調査区外の南側へ延びている。包含層の厚さは厚いところで20㎝を測る。覆土は鉄滓を主とし、茶褐色を呈す。出土遺物は土器、瓦、製鉄関連遺物、銅製品などがある。鉄滓はとりあげただけでも83㎏を測る。

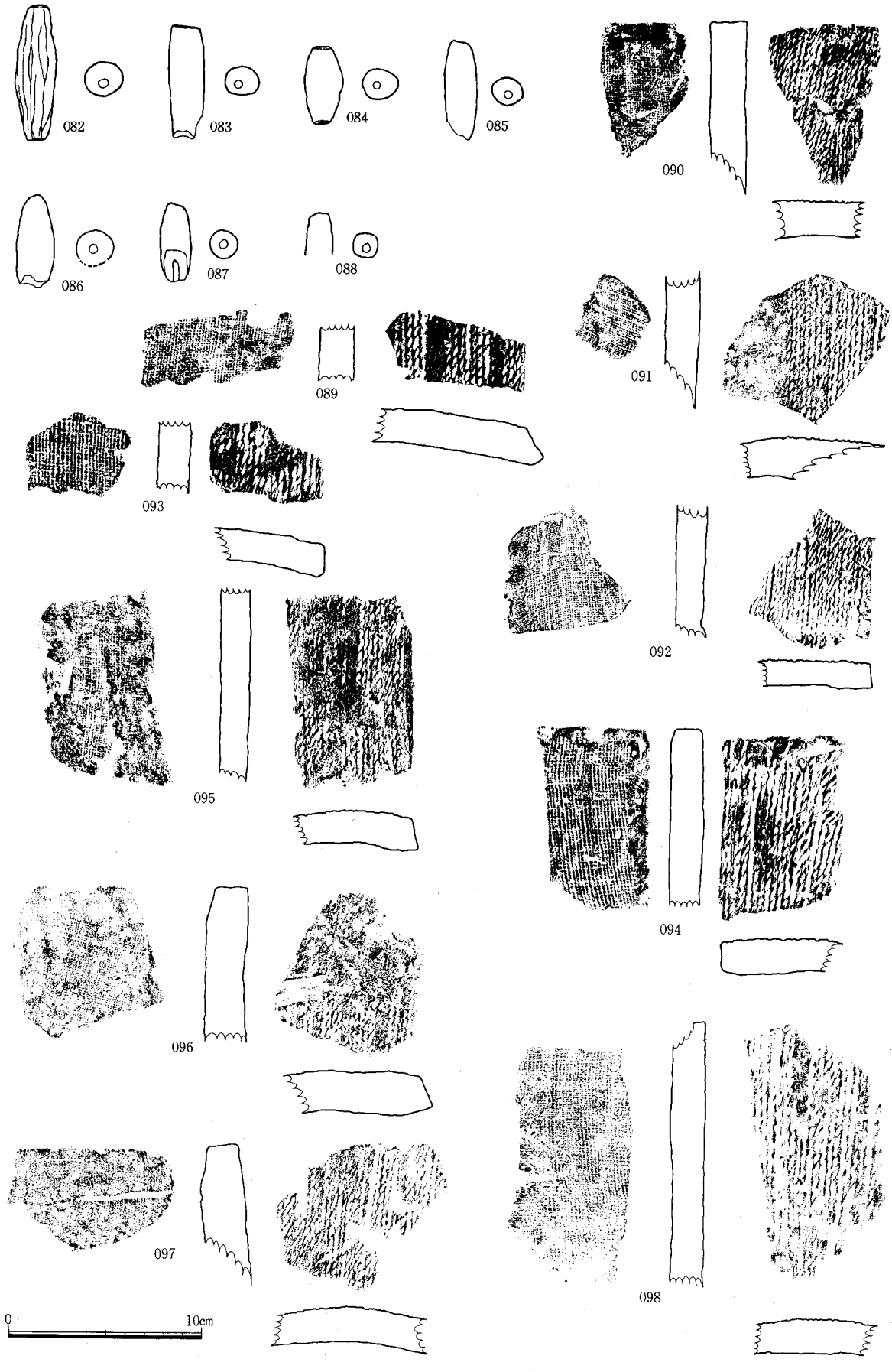
出土遺物（第11～16図）　024～048は須恵器坏蓋である。024はつまみを持つ坏蓋である。口径15.2㎝、器高3.05㎝を測る。つまみだけの出土は多い。025は口径16.8㎝を測る。胎土は精良で灰色を呈す。26は口径14.8㎝を測る。胎土は白色砂を僅かに含んでおり、濃灰色を呈す。焼成はやや甘い。27は口径16.3㎝を測る。上面の中央部は回転ヘラ削りを施している。28は口径16.5㎝を測る。胎土は白色砂を僅かに含んでおり、灰色を呈す。29は口径13.1㎝を測る。胎土は細かな砂を多く含み、青灰色を呈す。030は口径13.4㎝を測る。胎土は精良で焼成も良好である。031は口径14.9㎝を測る。045～067は須恵器高台付坏である。045は口径12.6㎝、底径7.4㎝、器高3.9㎝を測る。胎土は精良で青灰色を呈す。046は口径9.4㎝、底径6.3㎝、器高4.05㎝を測る。胎土は精良で暗灰褐色を呈している。047は口径14.3㎝、底径8.9㎝、器高4.6㎝を測る。胎土は精良で灰白色を呈す。底部外面はヘラ削りである。067は外面底部に墨書がなされている。墨書文字はやや不明瞭であるが『大殿』と書かれており、建物の名称であると思われる。068は高台付の盤である。底径は21.8㎝を測る。須恵質で暗赤褐色を呈し、胎土に白色砂を多く含む。069は高坏の脚部である。070～072は須恵器甕口縁である。070は口縁23.6㎝、072は口縁12.3㎝を測る。073は瓦質である。外面は黒色を呈す。074～079は甑の把手である。080は鞴の羽口である。土師質で赤褐色を呈す。片端を欠損している。最大幅5.9㎝、内径3.4㎝を測る。羽口先端の一部に鉄滓状の物が付着している。内面は黒褐色を呈す。081は坩堝である。丸底で半球状をなす。口径9.9㎝、器高5.2㎝を測る。最初器高3.8㎝につくり、その後外底部に粘土を貼付け底部を厚くしている。082～088は土錘である。082～084は須恵質で085～087は土師質である。082は全長6.9㎝、径2.1㎝を測る。手で成形したあと端から端まで軽いヘラミガキを施している。083は片端を欠損している。径1.8㎝を測る。手で成形したのち両端を切り落としている。084は全長4.0㎝、径1.95㎝を測る。085は全長5.2㎝、径1.65㎝を測る。086は径1.95㎝を測る。087は全長約4.2㎝、径1.65㎝を測る。088は幅1.4㎝を測る。089～112は瓦である。そのほとんどと平瓦であるが、109と110は丸瓦の玉縁部で



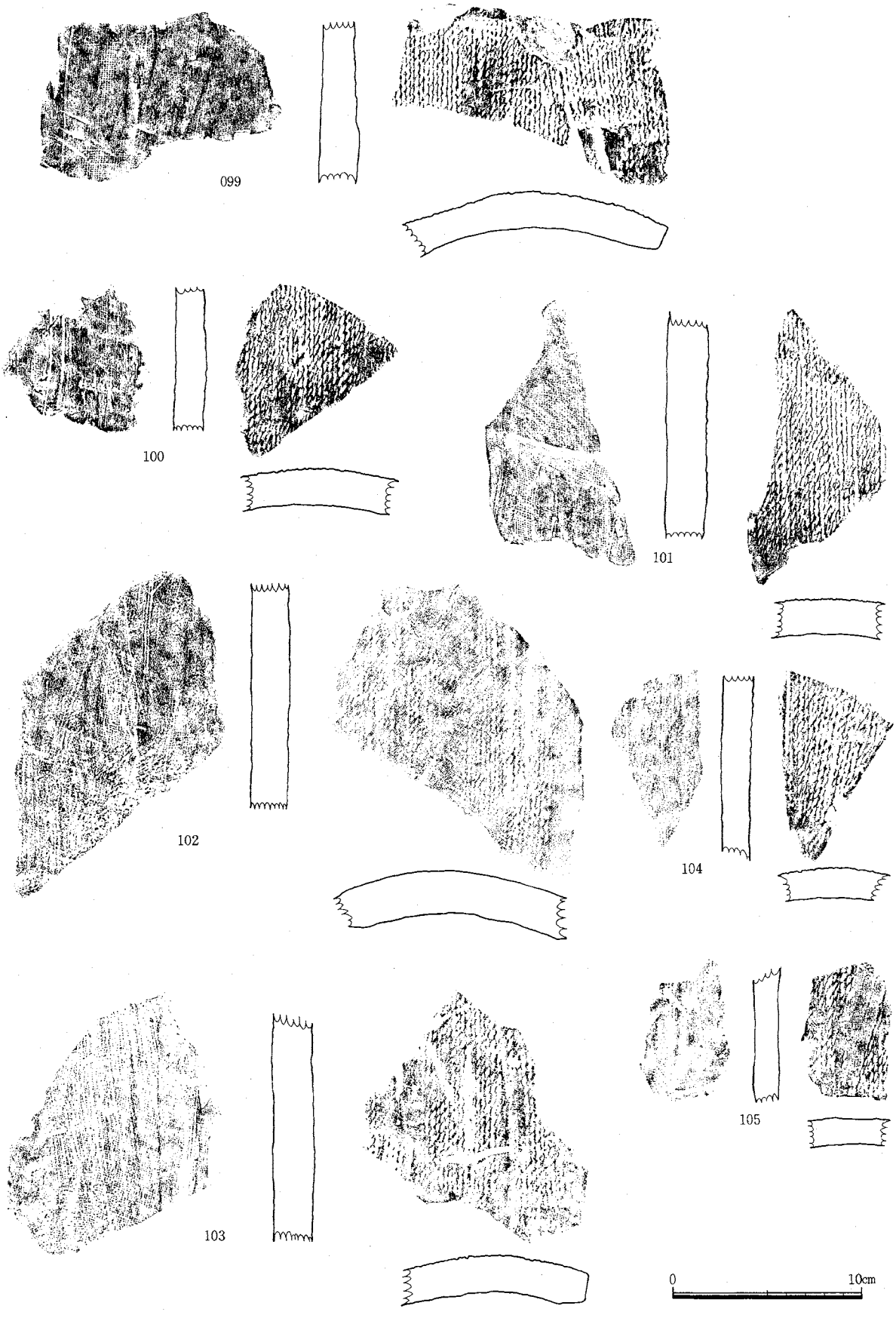

**第11図**　包含層出土遺物実測図（1/3）



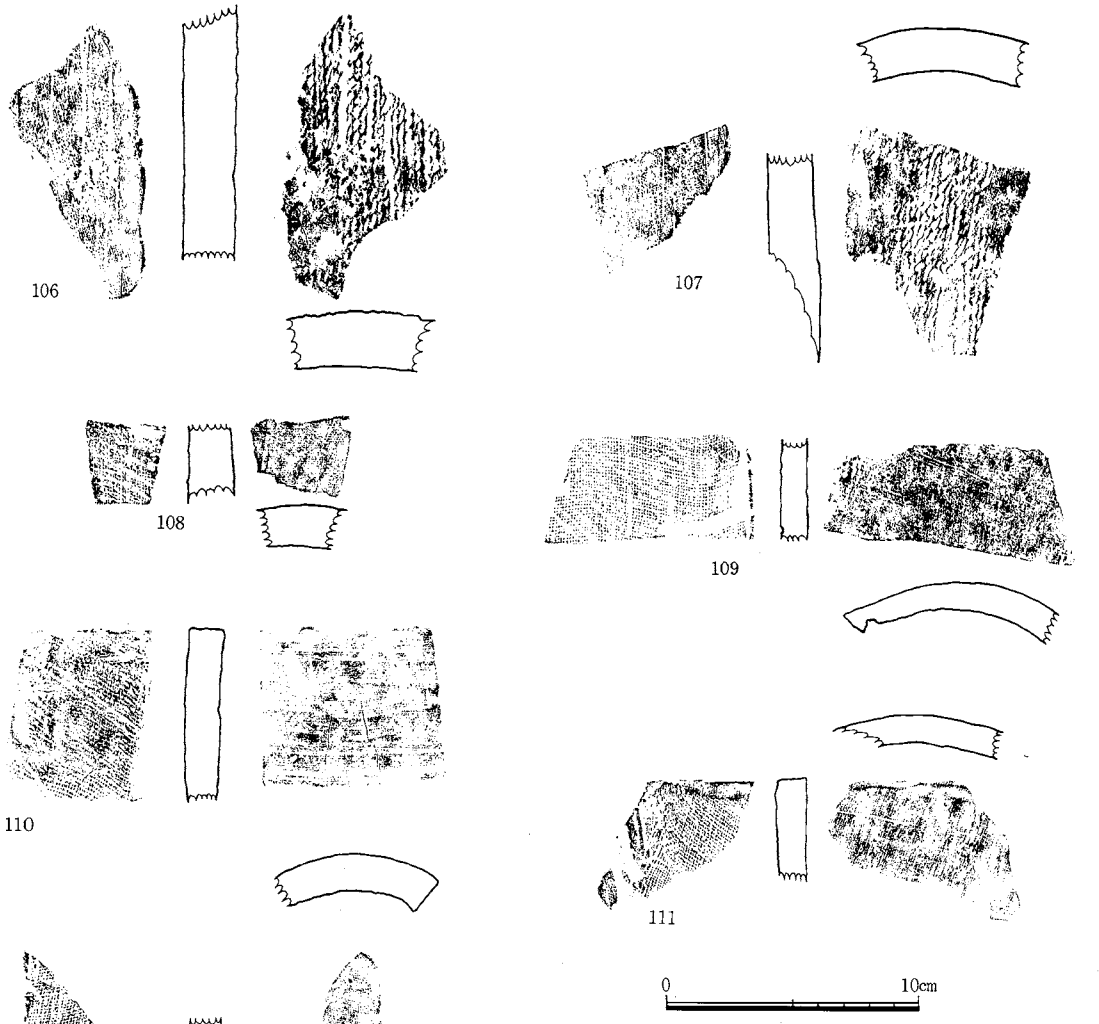

**第12図**　包含層出土遺物実測図Ⅱ（1/3）



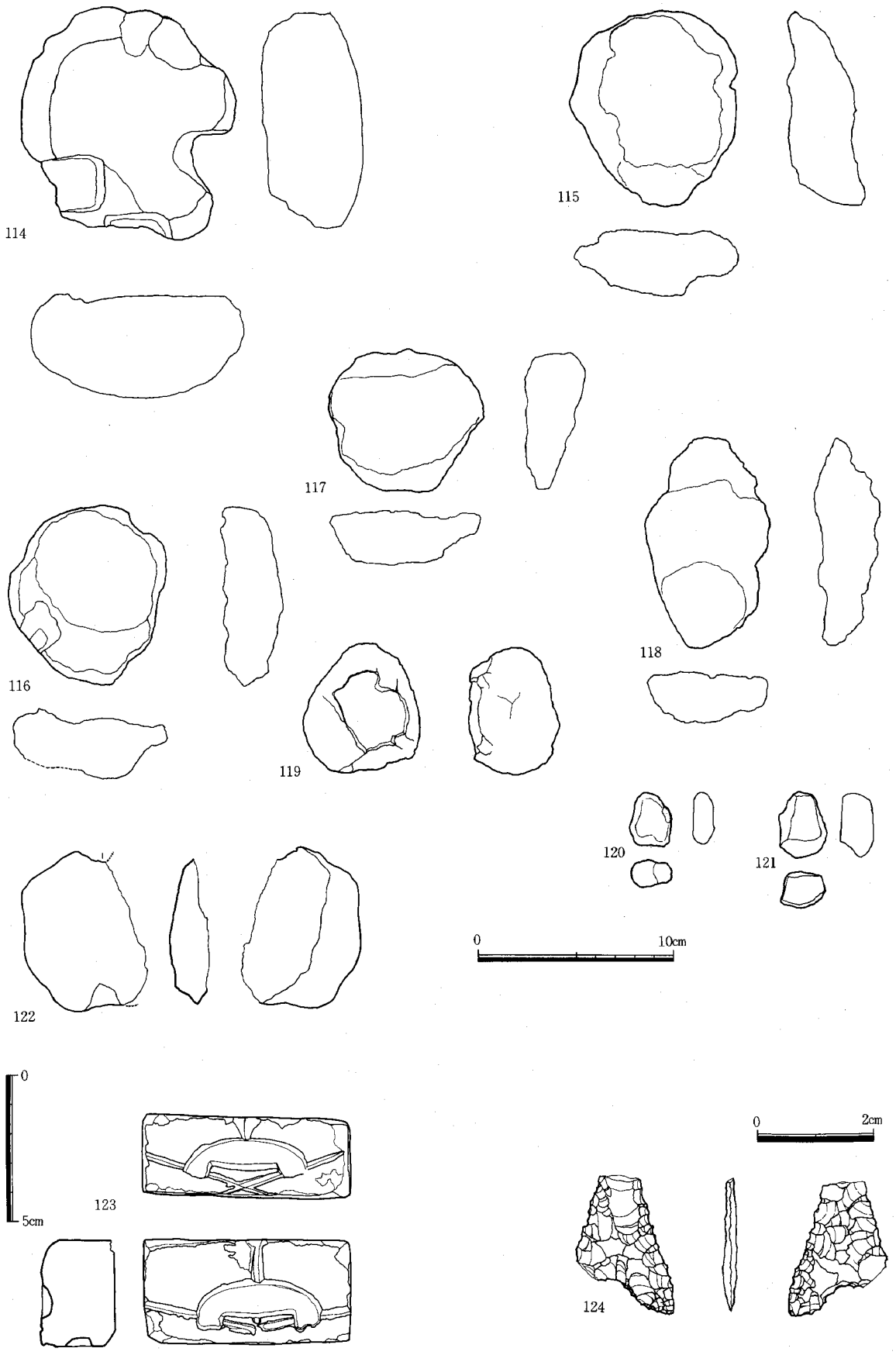

**第13図**　包含層出土遺物実測図Ⅲ（1/3）




**第14図**　包含層出土遺物実測図Ⅳ（1/3）




**第15図**　包含層出土遺物実測図Ⅴ（1/3.1/1）




**第16図**　包含層出土遺物実測図Ⅵ（1/3.1/2.1/1）

あると思われる。089～098は凸面が縄目圧痕、凹面が布目圧痕で089～094が須恵質、095～098は土師質である。099～103は凸面が縄目圧痕、凹面は布目圧痕の上にヘラ削りが施されている。099・100は須恵質、101～103は土師質である。104～107は凸面が縄目圧痕、凹面がヘラ削りである。107は須恵質、104～106は土師質である。108～112は凸面がヘラ削り、凹面は布目圧痕である。108.109は須恵質、110～112は土師質である。これらの瓦は鉄滓の層から出土し、鉄滓が付着した瓦も多い。113は銅銙である。方形の巡方で縦2.5cm、横2.7cmを測る。金属板の厚みは約1㎜であるが4辺の縁が断面コ状に曲がっており、中高となっていて1.4㎜ほどの厚みを持つ。内側には腰帯への取り付け金具である3㎜程の鋳出しの針が4隅につく。114～118は椀型鍛冶滓である。114は底面全面に炉底の粘土がこびりついている。また滓を炉底から取り上げたときの工具痕が4箇所みられる。115は平面形がほぼ円形を呈し、表面全面に細かな穴が見られる。重さ310ｇを測る。116は全面に細かな穴が多く見られる。重さ250ｇを測る。117は重さ180ｇを測る。118は底面に激しい凹凸がみられ、一部に炉底の粘土がこびりついている。重さ200ｇを測る。119は含鉄椀型滓である。小割りされており、椀型は呈していない。メタルチェッカーの反応の強さはＬ（●）である。重さ200ｇを測る。120・121は鉄塊系遺物である。メタル反応はＬ（●）である。120は炭化物を含む。重さ10ｇを測る。121は全体が錆びており、暗赤褐色を呈す。重さ40ｇを測る。122は石錘である。約1/2が欠損している。123は金武小学校校舎建て替えの工事中、地下約1ｍの地点で発見された鉛錘の鋳型である。蛇紋岩製で2面に型が彫られている。124は調査区周辺で採集した黒曜石製の石鏃で先端と一方の基部を欠損している。

## 4．まとめ

調査以前は都地城の関連遺構と甕棺の存在が考えられた。前者は明確に関連づけることができる遺構は確認できなかった。甕棺は調査区内では検出できなかったが、包含層中に破片が数点含まれているので3次調査の甕棺墓群が近くまで延びるものと思われる。

本調査区内において顕著だったのは製鉄に関連する遺構と遺物である。製錬炉と思われるSX001・SK002・SK003や粘土貯蔵穴のSK004の他に、鉄滓が出土するピット群等がある。また、鉄滓は出土していないがSD006は床面直上の礫群の多くが火をうけた痕跡を持ち、その中の一つが金床石ではないかと考えられるため、これも製鉄の関連遺構ではないかと思われる。包含層は調査区西側からの流れ込みであり、鉄滓を主にする。鉄滓は流動滓などは見られず椀型鍛冶滓がほとんどである。その他には製錬炉のものと思われる炉壁が出土しているが、製錬滓らしきものは出土していない。その他、鉄滓中に8世紀前半から後半の須恵器と一緒に瓦が多く出土したことや、役人の階級を明示する銅銙が出土したこと、又『大殿』と書かれた墨書土器などから、製鉄に関連する官衙施設の存在も考えられるのではないだろうか。今後の課題としたい。

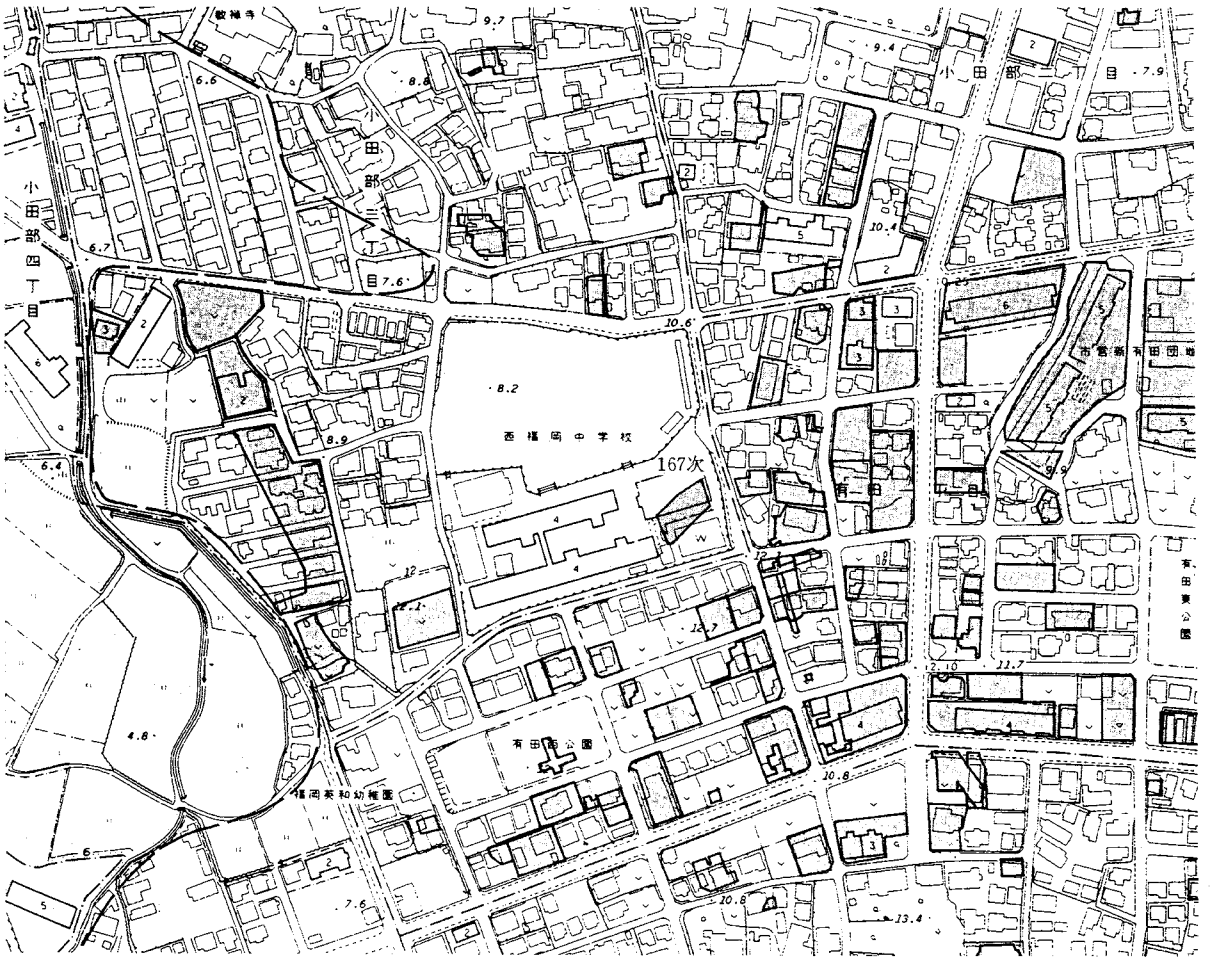
# 有田167次調査

## 1　はじめに

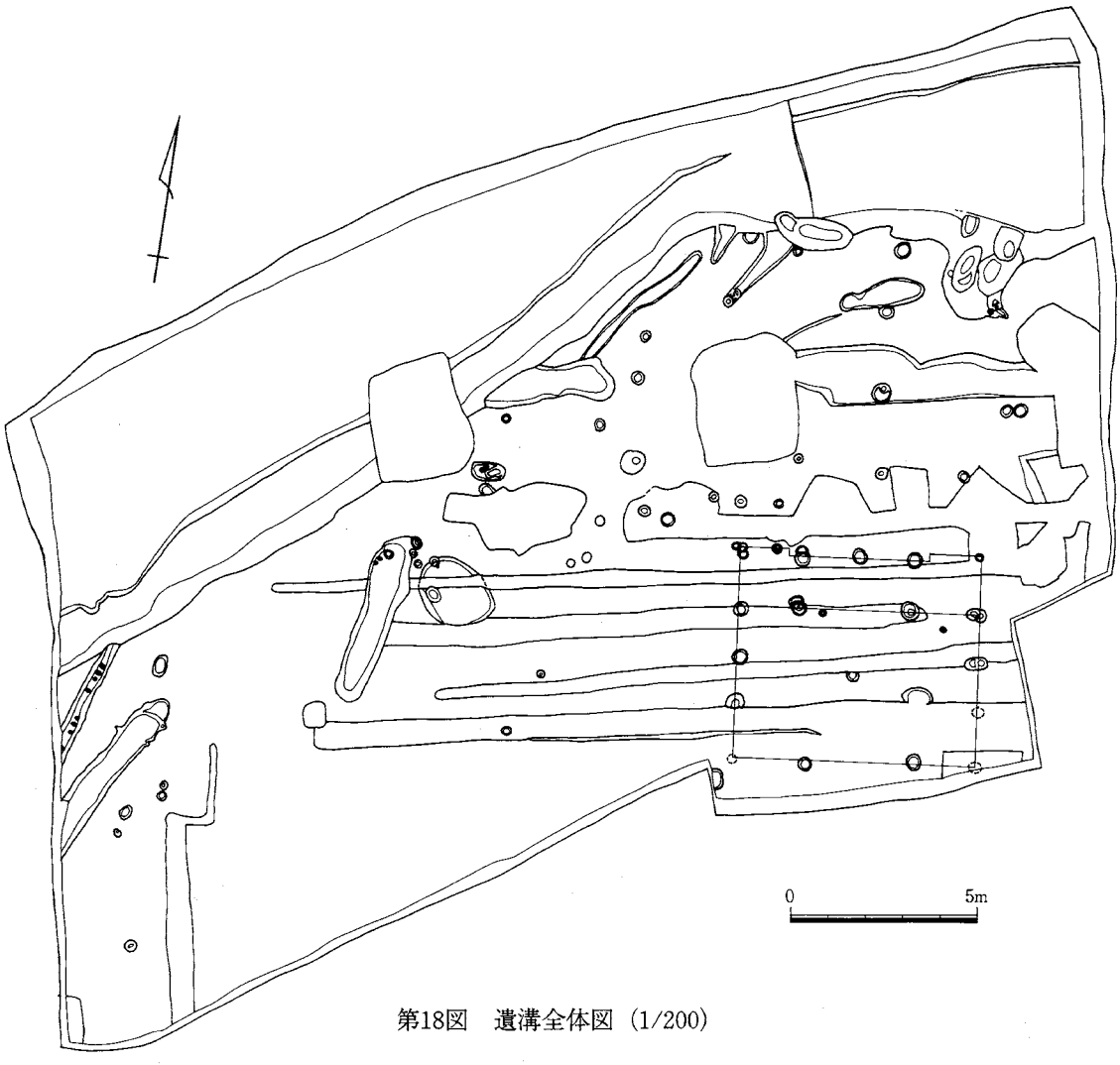
### 1）調査に至る経過

教育委員会では学校教育環境の整備充実のため諸施設の充実を計っている。今回調査を実施した西福岡中学校の体育館、プールは老朽化が激しく立て替えることとなった。施設課より遺跡の有無について依頼があり、平成２年度に試掘調査を実施した。既存施設の周囲空き地にトレンチを設定したが谷部への落ち際が確認できただけで、遺構は確認出来なかった。その後既存施設撤去後の平成３年７月５日試掘調査を実施した。３本のトレンチを掘削したが北側は谷部、南側は削平を受け遺構は存在しなく、中央部の削平を免れた地点から谷部の落ち際にかけてピット、土壙が確認され、その個所のみ調査を実施する運びとなった。

教育施設の関係上、大きな騒音の出る杭打設等は夏休み期間中に終える必要性から７月10日に調査に着手し、遺構の希薄なこともあり７月25日に調査を終了した。なお調査に関するデータは以下の通りである。




第17図　遺跡周辺地形図（1/4,000）




第18図　遺溝全体図（1/200）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 遺跡調査番号 | 9117 | | | 遺跡略号 | ART－167 |
| 調査地地籍 | 福岡市早良区小田部3丁目32－1 | | | 分布地図番号 | 82 |
| 開発面積 | 1,600㎡ | 調査対象面積 | 500㎡ | 調査面積 | 510㎡ |
| 調査期間 | 1991（平成5）年7月10日～7月25日 | | | | |

## 2）調査区の立地と地形

有田遺跡群は最高所の標高約13m前後を測る洪積台地上に展開する遺跡群で昭和41年の区画整理事業に伴う調査以来今日まで170か所に及ぶ調査を実施している。旧石器時代から近世に至る遺物、遺構が検出され多くの成果が得られている。古式土師器の有田式土器が設定されたり、律令時代にはこの地区は早良郷田部に比定され、大型の建物群や柵に囲まれた倉庫群なども検出され、越州窯、長沙窯製品、円面硯、石帯等の遺物を考慮すると官衛的施設の存在を伺わせる。さらに中世には小田部氏の小田辺城がありその関連の遺構などが確認されている。

有田遺跡群は台地に沿って八つ手状の分布を示すが、今回調査した地点は中央部に西側から谷が深く入り込んだ縁に位置する。標高10.5m前後で南西から北西に緩やかに傾斜する台地の縁に位置し、北側は深い谷部となる。学校建築時に南側は1mから1.5m削平し北側の運動場から校舎にかけ埋立てられ旧地形を大きく損なっている。

### 3）調査の組織

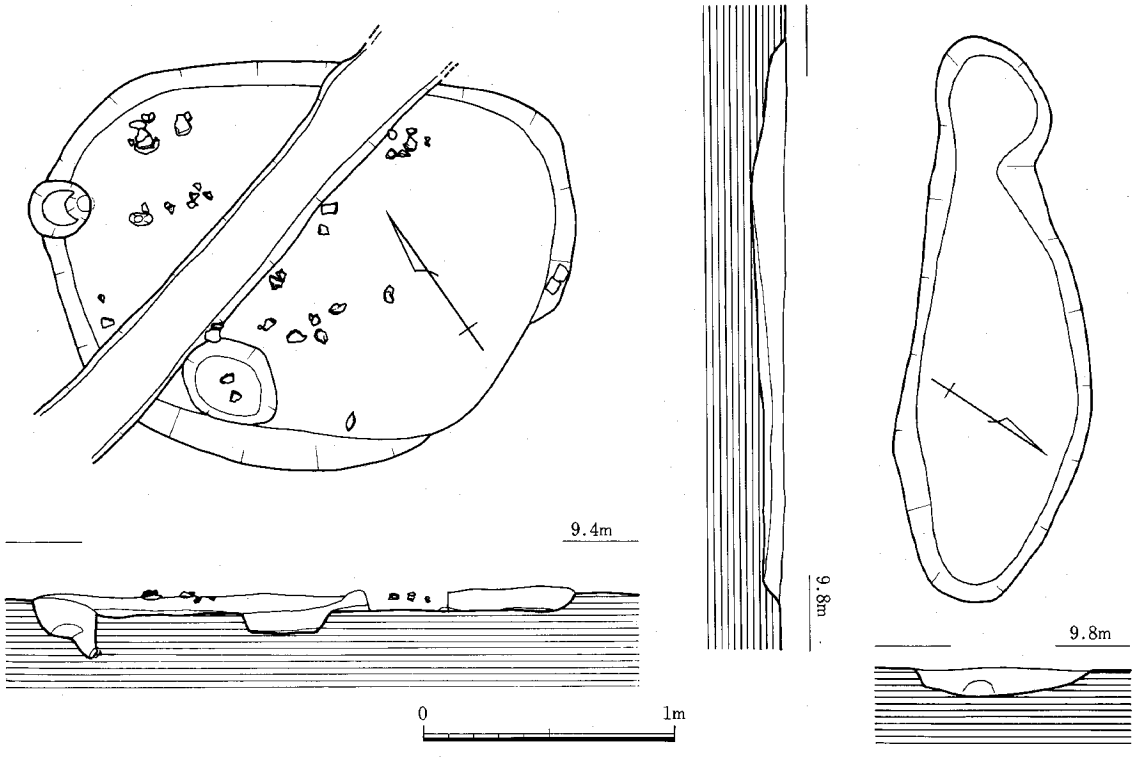
**調査委託**　福岡市教育委員会施設課
**調査主体**　福岡市教育委員会
**調査総括**　文化財部長　後藤　直
埋蔵文化財課長　折尾　学
埋蔵文化財課第一係長　横山邦継　飛高憲雄（前任）
**調査庶務**　埋蔵文化財課第一係　入江幸男
**調査担当**　埋蔵文化財課第一係　松村道博
**試掘調査**　埋蔵文化財課第一係　井沢洋一　吉武　学
**調査・整理補助**　濱石正子　撫養久美子　入江のり子　牟田恵子　飯田千恵子　吉岡清美　有吉貞江　池弘子　清水文代　中村千里　西納テル子　古井モモ江　吉岡員代　吉岡竹子　吉岡蓮江　井上靖崇

## 2．遺構と遺物

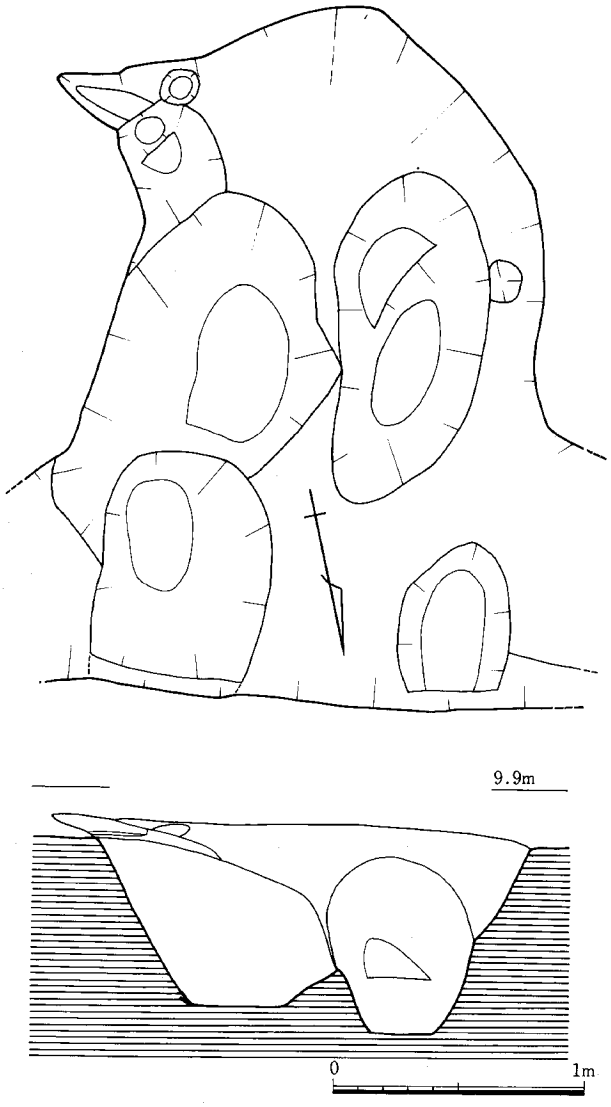
今回の調査では溝、土壙、掘立柱建物を検出したが遺構の残りは悪く、出土遺物も少ない。学校造整時に高い部分の削平を受けたため遺構の上半部、及び包含層が消失したためであろう。

### 1）土壙

**1号土壙**（第19図）




第19図　1、2号土壙実測図（1/30）




第20図　3号土壙実測図（1/30）

調査区中央部で検出した楕円形の土壙である。中央を横断する溝に切られる。ほとんど床面しか遺存していなく、主軸を北西－南東にとり、その規模は長径2.09m、短径1.61m、深さ0.1mを測る。覆土は暗褐色の軟らかい土壌で遺構検出面より土師器、須恵器が出土する。西北端と南側の壁際にピットが掘り込まれる。

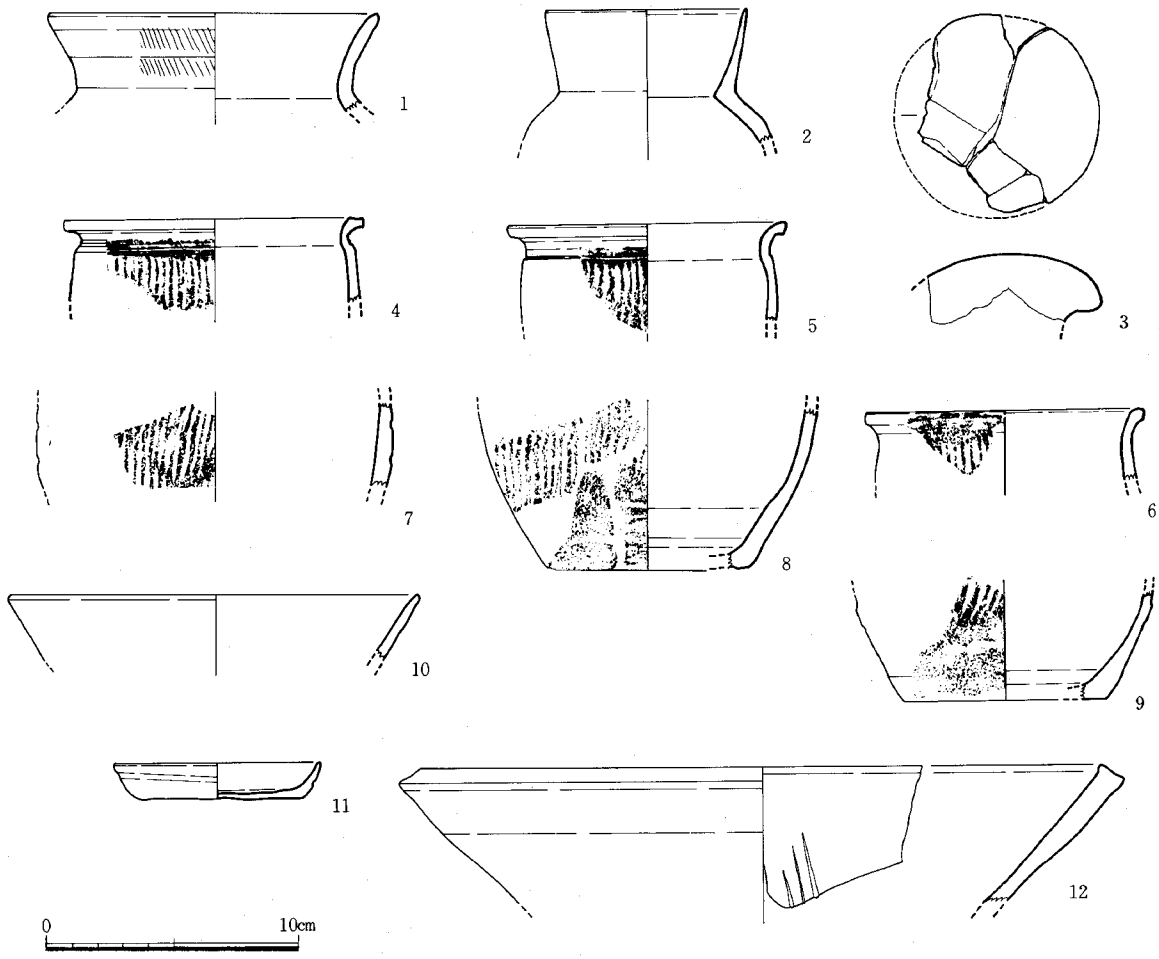
出土遺物（第21図－1～9）

1、2は土師器で胴部から口縁部にかけての破片である。1は中型の壺形土器の頸部がくびれ外反する口縁部となり、端部は丸く収まる。外面に縦の刷毛目調整を行い、ヨコナデする。胎土には砂粒を少し含み焼成は良く淡橙色となる。2は口径4.0cmの小型の壺形土器で頸部でくびれ、内面に稜をもち内湾しつつ立ち上がり、端部は尖り気味になる。口縁部はヨコナデ、他はナデ調整である。胎土には砂粒を少し含み焼成はあまり良くなく淡灰褐色を呈する。3は釦状を呈する土製品で器面調整具であろうか。湾曲部は扁平な半球形の形態を示し、側面で縊れさらに下に続くが下面は破損し全体の形状は不明である。器表面は荒れており調整は明らかではないが、湾曲部はナデ調整であろう。縊れ部には指跡が残る。胎土には砂粒を多く含み焼成は良好で淡い肌色を示す。4～9は軟質でいわゆる韓式系土器である。口縁部の異なる破片が3点あり少なくとも3個体以上あろうが底部と接合しない。いずれも小型品で口径11.5cm前後を測る。底部は平底で、外底面は箆調整、胴部は平行沈線状のタタキを文様的に施す。口縁下と底部から3cm位をナデ消している。4は口縁部の破片で口縁部下のタタキとの境にナデによる明瞭な稜を作りだす。上面は水平に折り曲げ端部は上に引上げ下端とともに角張らせる。5は口縁部を緩やかに屈曲させ上面の口唇部近くを窪ませ端部を角張らせる。6はさらに屈曲が弱くなり胴部から緩やかに外反させる。端部は5と同様である。8は底部から胴部の破片で底径8.5cmを測る平底で、外底面には凹凸があり箆調整の痕が残る。内面の底部との境は箆ナデ、胴部はナデ調整である。4～8は淡黄褐色で焼成も良好である。9は焼成が悪く赤茶色を呈する。

**2号土壙**（第19図）

調査区の北東部に検出した細長い土壙である。主軸をほぼ東西に取る長楕円形でその規模は長径1.25m、最大幅0.75m、深さ0.1mを測る断面皿状を示す。覆土は青灰色、黄白色粘質土のブロックを含む灰褐色土である。

出土遺物（第21図－10）




第21図　土壙出土実測図（1/3）

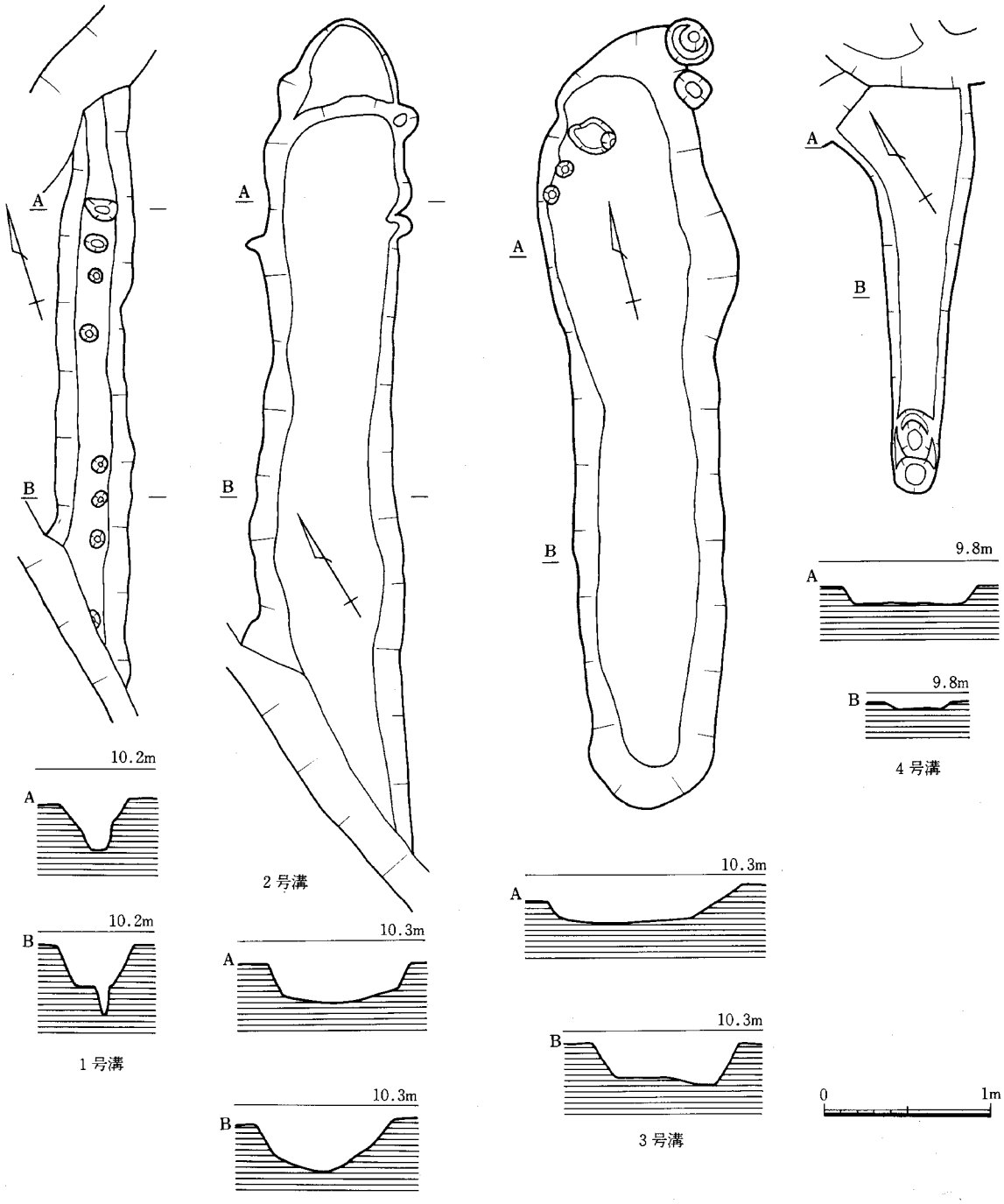
遺物は小量で実測出来たのは土師器の椀あるいは坏の口縁部１点だけである。胎土は緻密で焼成良好である。器面は磨滅し、調整不明。

**３号土壙**（第20図）

調査区の北東部、２号土壙の東に隣接する。谷部への落ち際で北側半分は段落ち部と同一高で上場の線は認められない。土壙の中の深い掘り込みだけが遺存する。不整形の長楕円形を呈し西東に４個所の深い掘り込みが認められる。規模は東西1.56ｍ、南北２ｍ以上、最も深いところで0.81ｍを測る。床面のほとんどは大きなピットで占められ、前述したピットのほかに北側にも２個がありこの土壙に伴うか否か不明。覆土は砂混じりの茶褐色土で軟質である。

出土遺物（第21図－11、12）

11は底部糸きりの土師質土器の小皿で完形品である。安定した平底で内湾気味に口縁部は立ち上がる。器表面は磨滅しており調整は不明。12は瓦質の摺鉢である。内面に３状の沈線を施す。胎土には砂粒を含むが精良で焼成堅緻、外面淡黄褐色、内面は灰褐色を呈する。器表面の摩耗が著しく調整は不明である。




第22図　1～4号溝実測図（1/40）

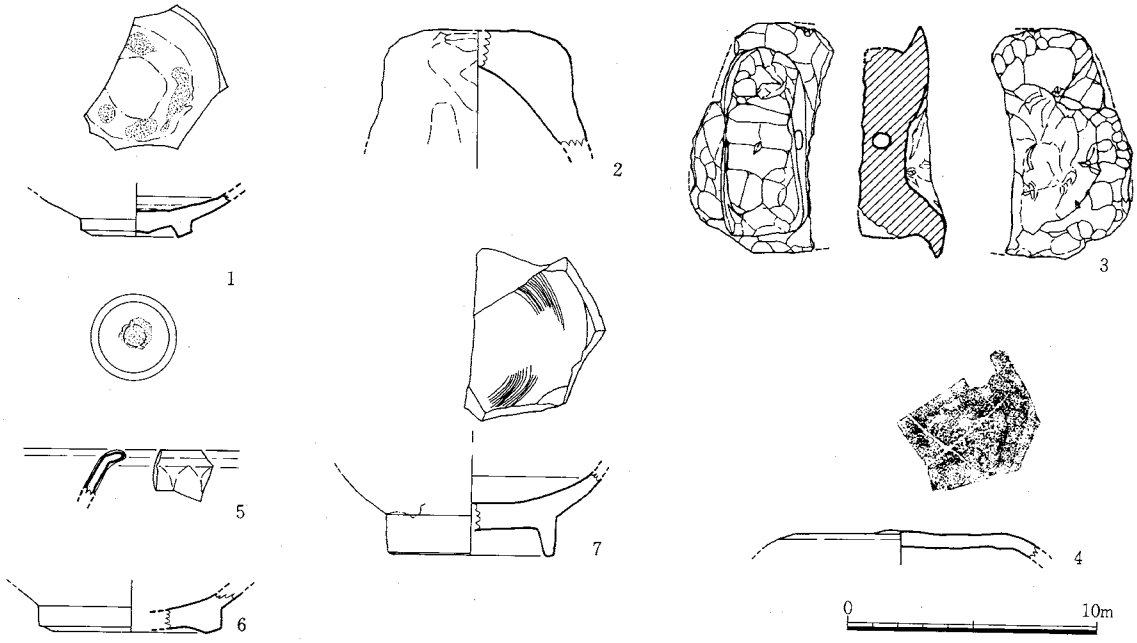
## 2）溝状遺構

**1号溝**（第22図）

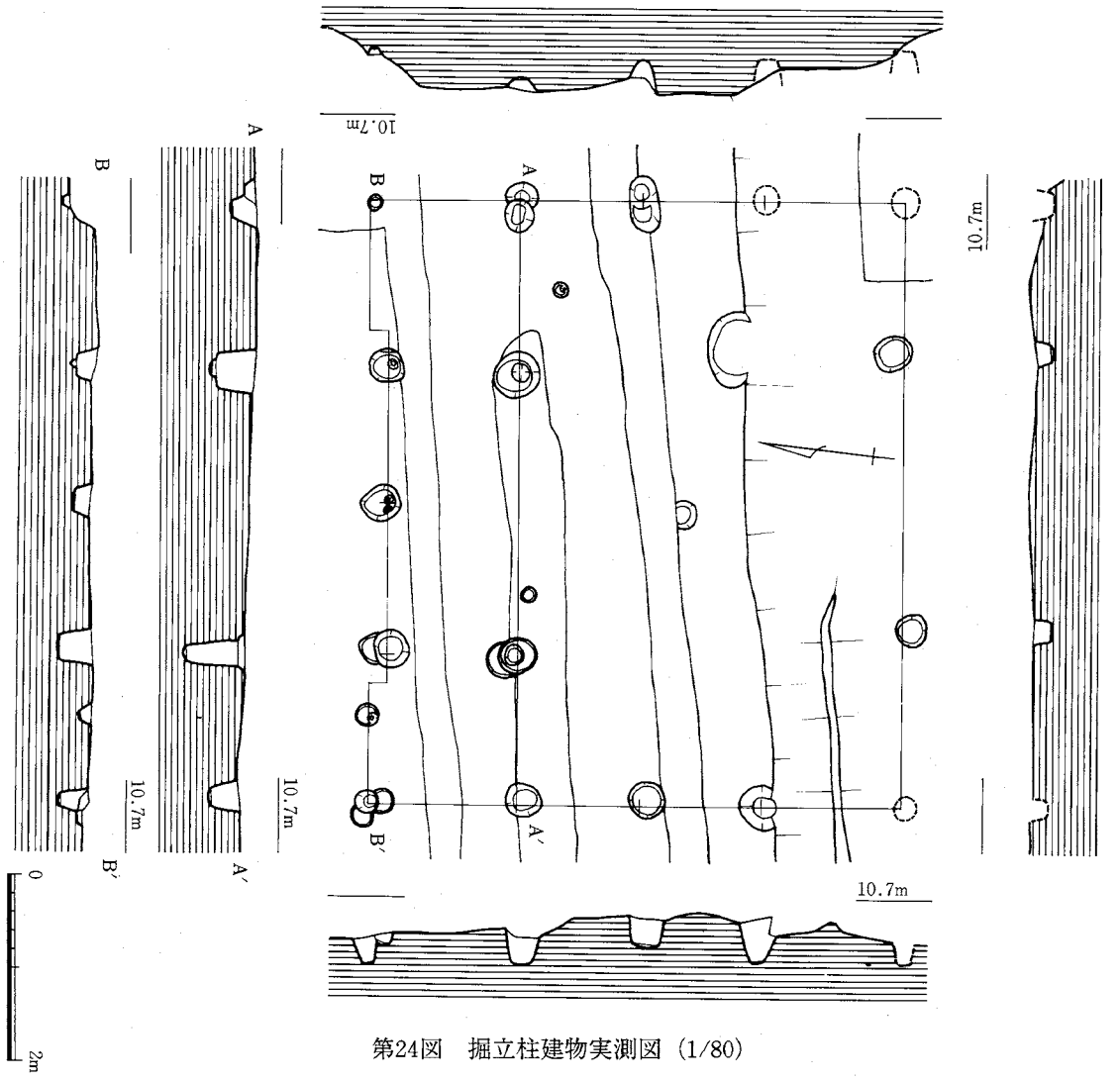
調査区の西端に位置し大部分が調査区外に拡がる溝である。南西から北東に延び谷部に落ちる。幅0.45m前後で直線的に延びる。覆土は暗茶褐色土で床面近くはローム層が混じる。壁面は急峻に立上り床面には企画性のない間隔にピットを掘り込む。ピットの大きさは径10～20cmの不揃いで深さも20cm前後を測る。床面は谷部に向けて緩やかな傾斜を示す。

出土遺物（第23図－1）

白磁の高台付皿Ⅱ類である。胎土は緻密で見込の釉を輪状に掻きとり目跡が残る。外面は高台近くまで無釉。




第23図　溝出土遺物実測図（1/3）




第24図　掘立柱建物実測図（1/80）

**2号溝**（第22図）

1号溝の南に位置し少し方向を東に振る。北東部は調査区内で終結するが南西部は調査区外に拡がる。幅80～90cm、深さ約0.3m、現存長5.1mを測る。壁面はなだらかに立上り覆土は暗～黒褐色土の単一層で床面近くはローム層が流れ込んでいる。床面は平坦であるが両端が浅く中央部が深くなる。遺物は出土していない。

**3号溝**（第22図）

1号土壙の北東部に位置し南北方向に延びる溝状遺構である。調査区内で完結しその規模は最大幅1.14m、長さ4.71m、深さ10～20cmを測る。壁面は直線的に延びるが北東部が膨らみをもち北端にピットが数個堀込まれる。覆土は2号溝と同じ暗～黒褐色土である。

出土遺物（第23図－2、3）

2は土師器で支脚になろうか。焼成は良く胎土には砂粒を含むが緻密である。内面はナデ調整、外面には指跡が残る。3は滑石製の蓋形石製品である。平面形は長楕円形で中央部に長方体の取手を削り出し、直交する穴を貫通させる。表面には工具の痕が明瞭に残る。裏面の側縁は幅2cm前後の縁を取り平坦で滑らかに仕上げ、中央部は窪ませる。

**4号溝**（第22図）

調査区の北東部、1号土壙の西に位置する溝状遺構である。南東から北東に延び、幅を広げながら2号土壙と重複する。深さは10cm～20cmと浅く、北東部が深くなる。覆土は茶褐色の軟質な土壌である。

**1号堀立柱建物**（第24図）

調査区の南西端に検出した建物である。全体に撹乱の溝が掘られ遺構の残りが悪いが桁行3間、梁行3間の側柱だけの建物で北側に1間の庇をもつと考えられる。柱間距離は等間隔ではなく、梁間両端が130cmと150cm、中央部が130cm、桁間の北並びは中央部の柱がなく両端が162cmを測り、南側では多少ずれている。庇は梁間が160cm、桁間が162cmの等間隔となる。柱穴は径30～50cmの楕円形で、覆土は暗、黒褐色土である。

出土遺物（第23図）

須恵器の坏蓋の破片が1点だけ出土した。天井部に×状の篦掻きの窯印をもつ。

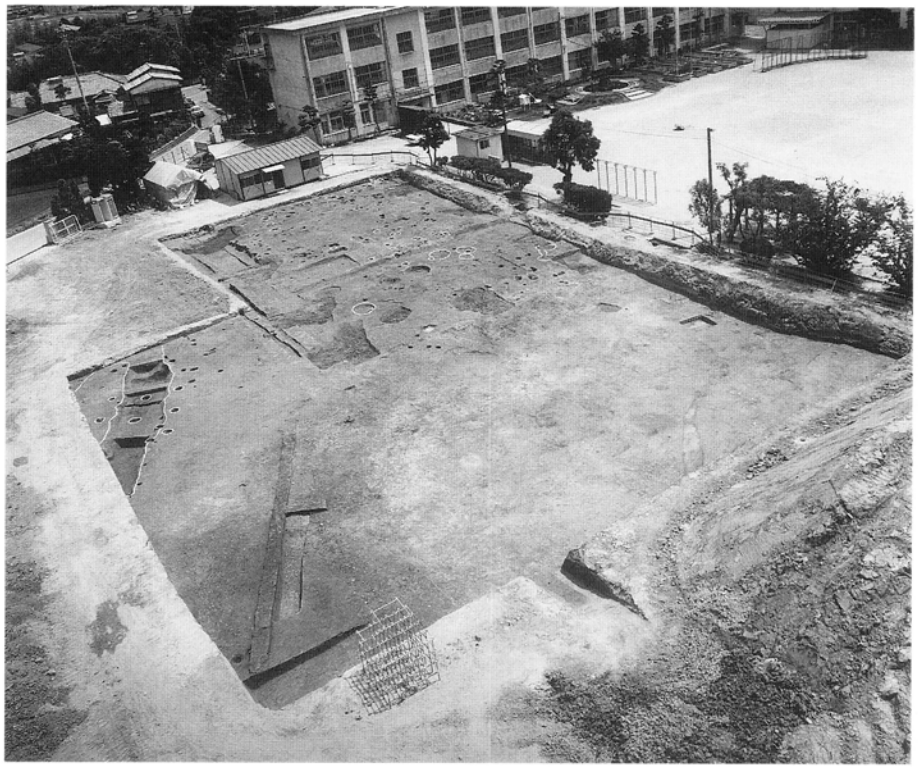
**その他の出土遺物**（第24図－5～7）

北側の谷部の覆土からは近世～現代の陶磁器類を多く出土したが、その中に少量の輸入磁器が含まれていたので図示した。5は龍泉窯青磁の碗である。外面に蓮弁文をもつ。6、7は白磁の碗で6はⅣ類、7はⅤ類であろう。

**おわりに**

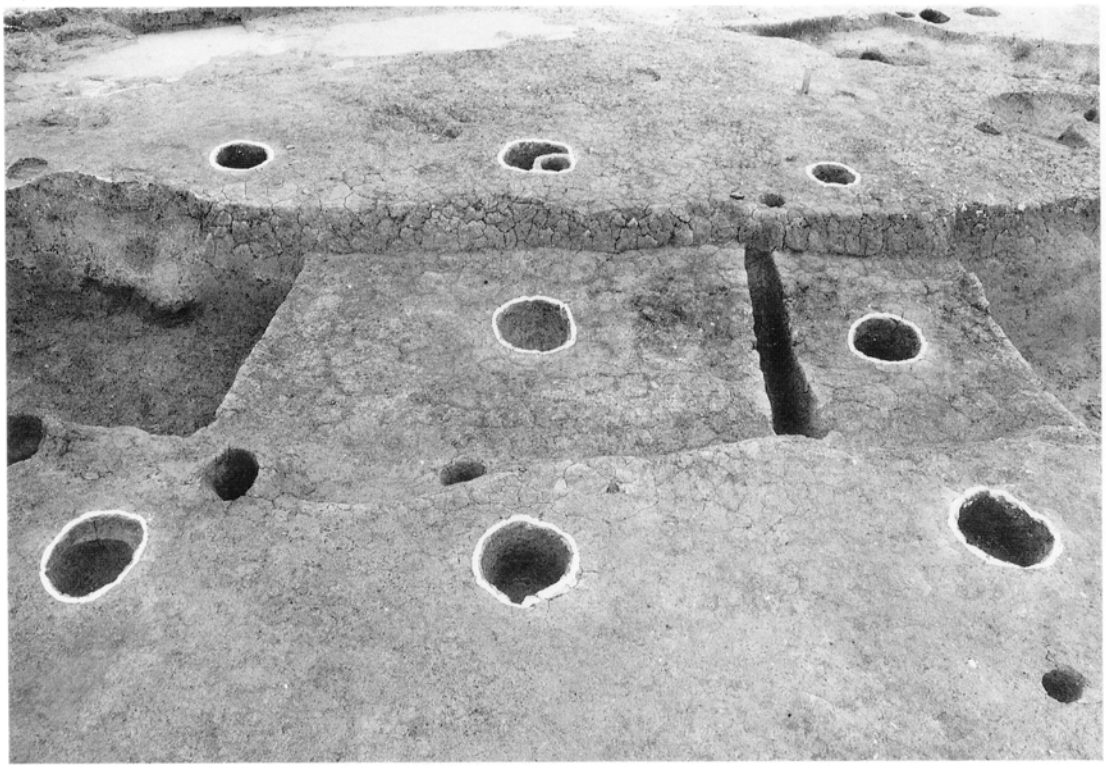
今回の調査では削平が著しく遺構の残りは良くなく土壙4基、溝4条、掘立柱建物1棟を検出したに過ぎない。遺物も少なく各々の時期は明確ではない。1号土壙は5世紀の前半、3号土壙は15、6世紀、1号溝は12世紀、3号溝もほぼ同時期か。掘立柱建物は須恵器が1点だけ出土し、古墳時代の広範囲工の建物であろう。以上のように古墳時代から近世に至る遺構が希薄な状態で検出できたことは有田遺跡群らしい有方である。

# 図　　版



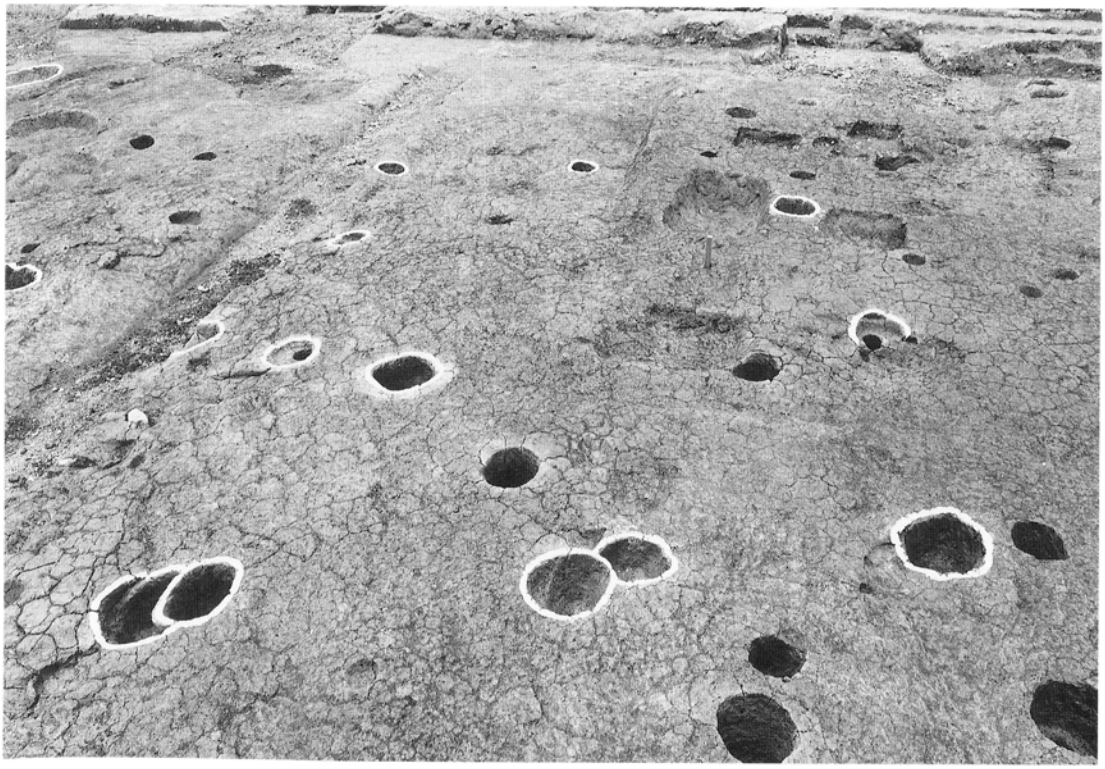
(1)都地遺跡群第 5 次調査全景（南から）

(2)拡張部（北から）

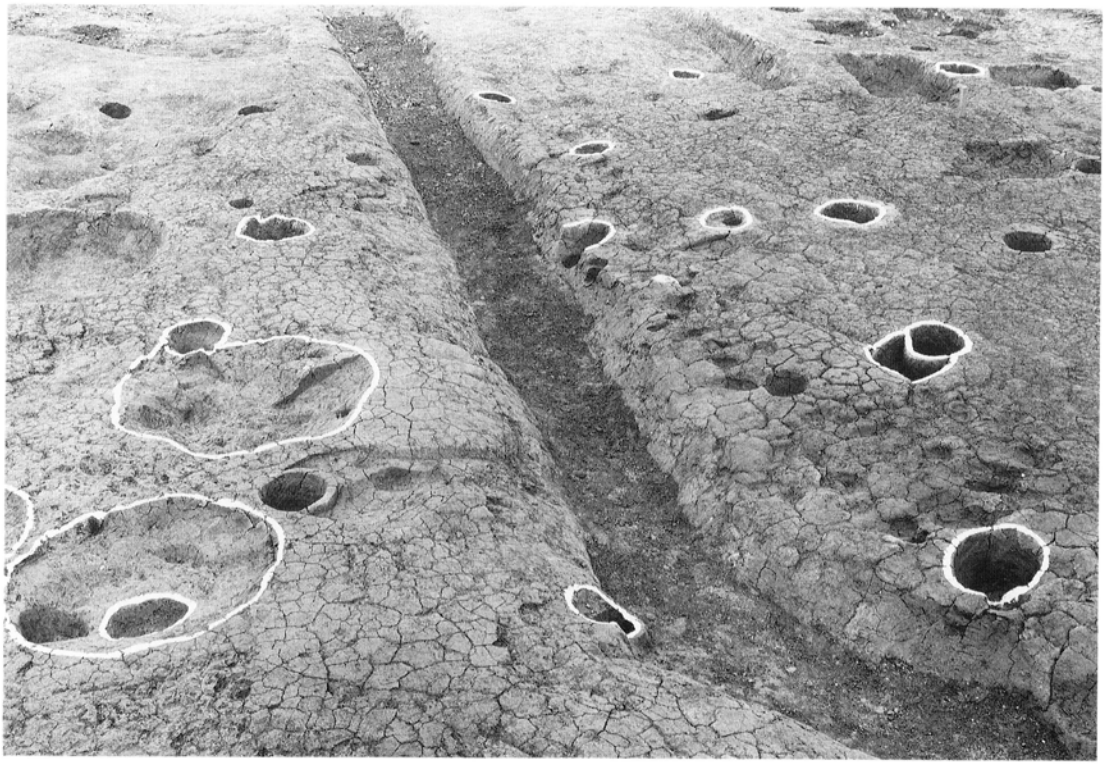


(1)SB01（東から）

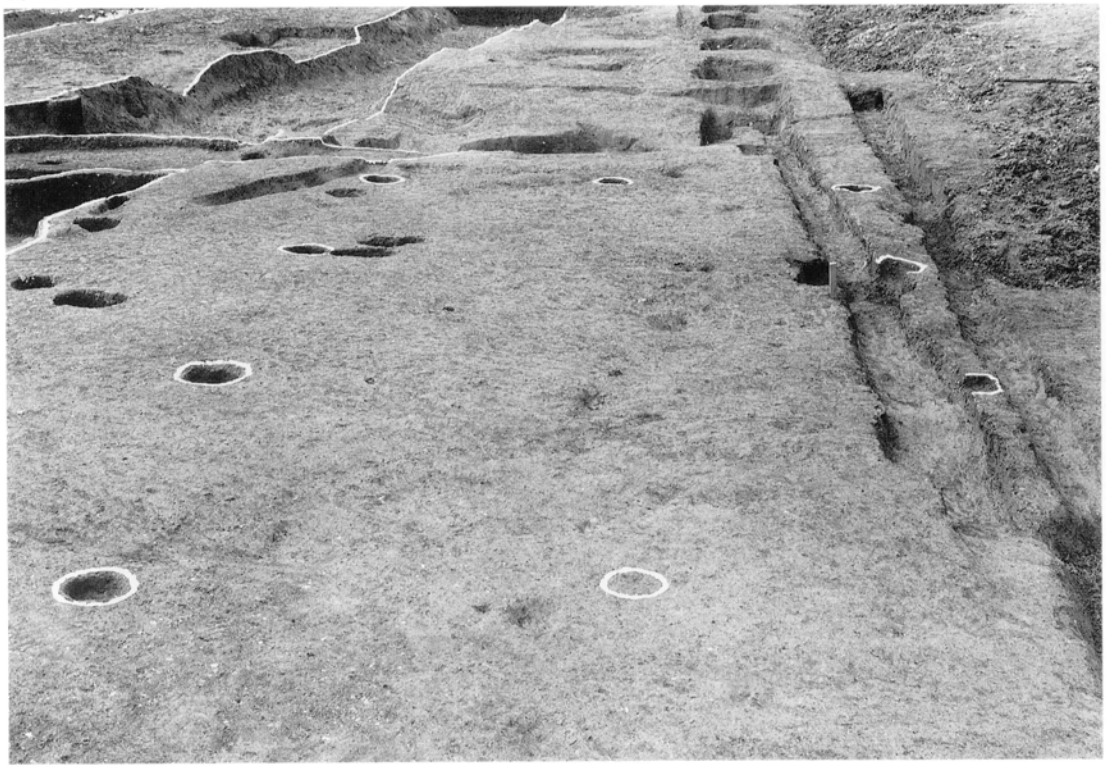
(2)SB02（東から）



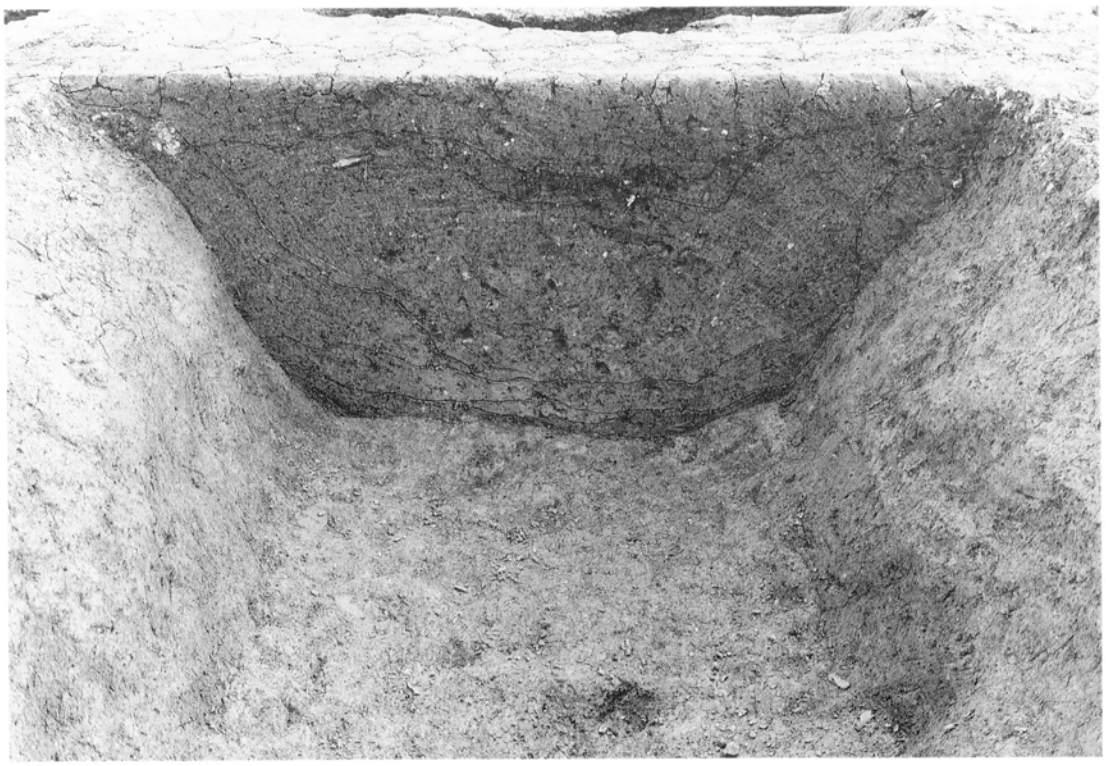
(1)SB03（東から）



(2)SB04（東から）



(1)SB06（南から）

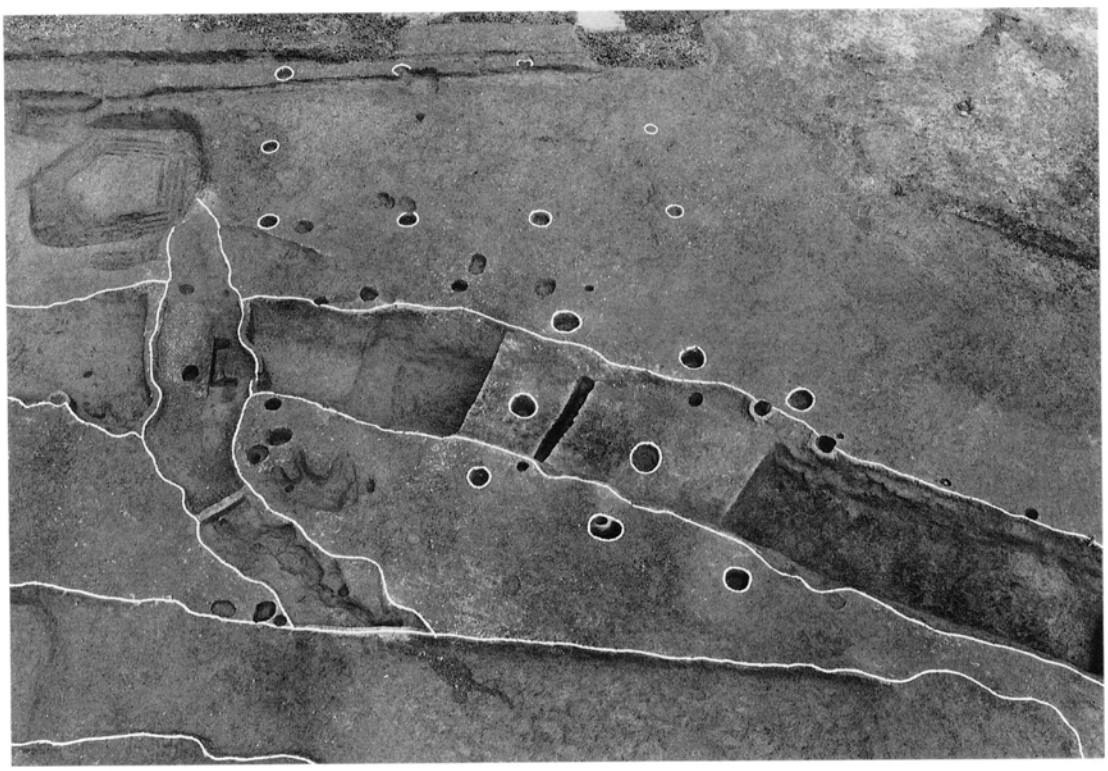


(2)SD005土層（北から）

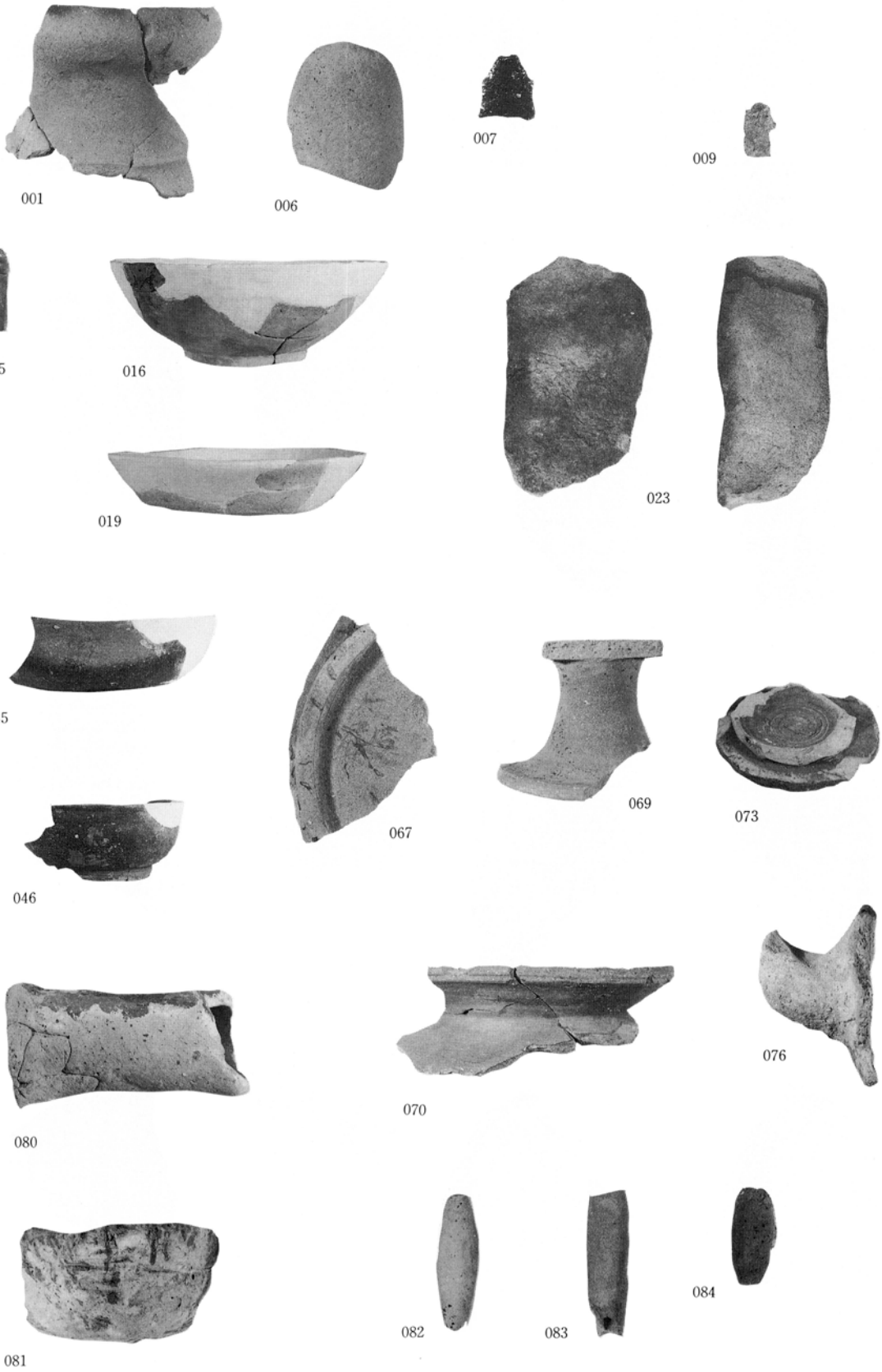
(1)SK002（東から）

(2)SK004土層（東から）

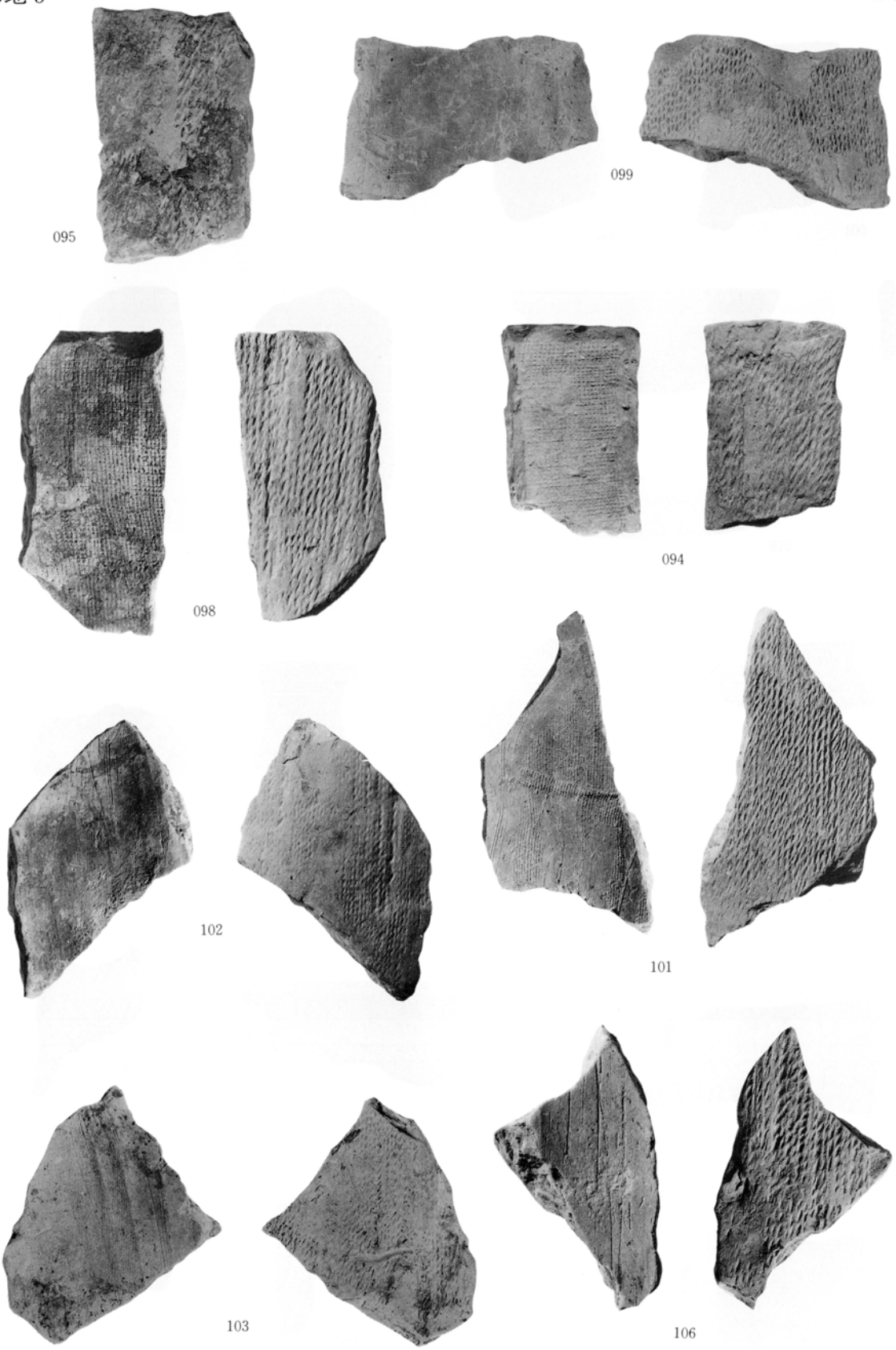
(1)SK003（西から）



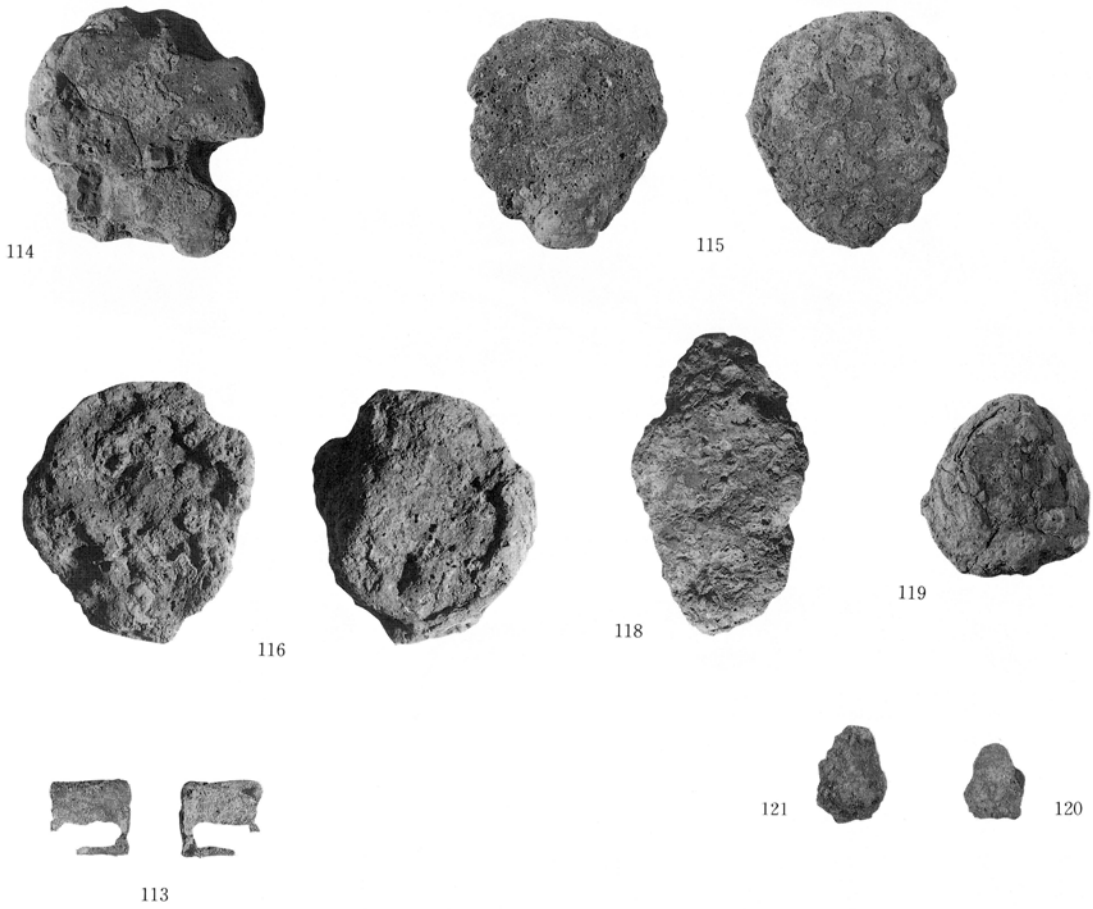
(2)拡張部（西から）


001
006
007
009
015
016
019
023
045
046
067
069
073
070
076
080
081
082
083
084

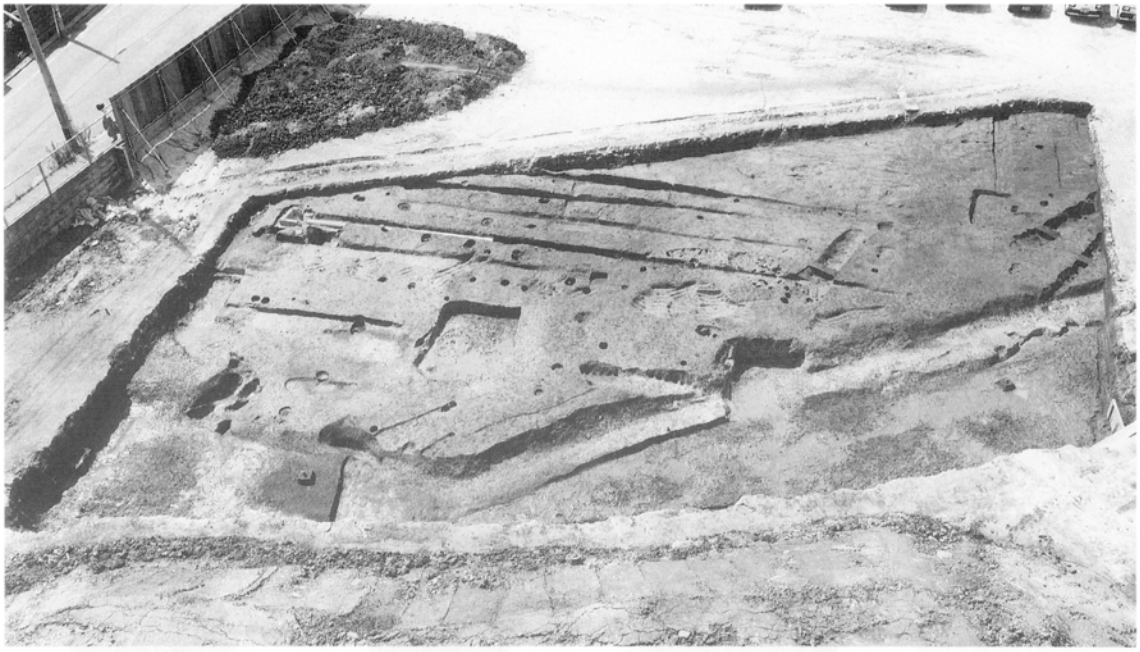
図版 7　出土遺物 I




図版 8　出土遺物 II



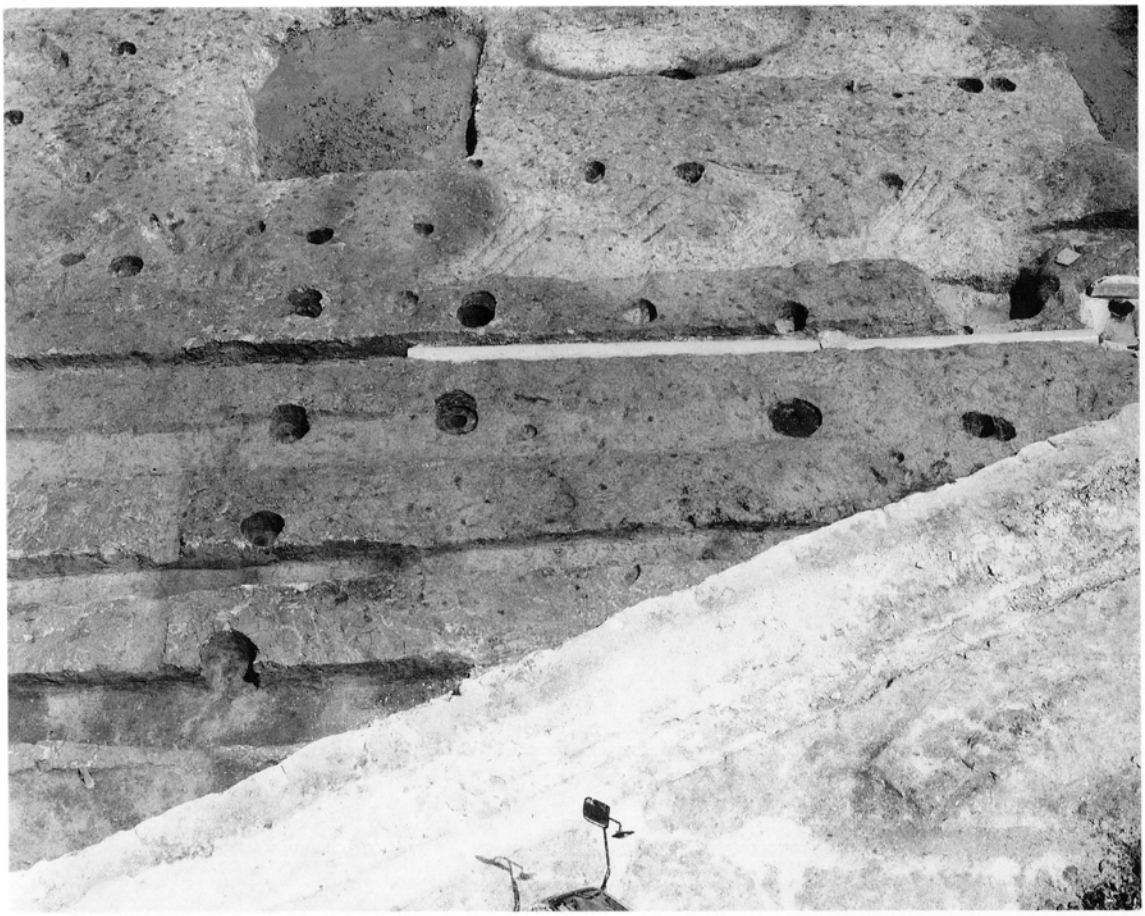

図版 9　出土遺物Ⅲ



（下）遺跡全景（西より）
（上）遺跡全景（北より）

（上）1号土壙（南西より）

（下）1・2号溝（南西より）



（上）掘立柱建物（南より）

（下）3号土壙（東より）

各区出土遺物